出産ケア政策会議

活動報告書

2021 年度ー第５期ー

2021.5 月～2022.4 月

ママのね
mamanone

ママになるための根っこを、いっしょに育てる。

「ママのね、」と将来自分の子どもに伝えたくなるような
出産体験を助産師さんと妊産婦さんでつくっていく、という想いを込めています。

そのためには、助産師さんと妊産婦さんが、ママがママになるための根本の部分を
いっしょに育てていくことが大切です。このプロジェクトでは、ママがママになるために
伴走してくれる助産師さんの大切さを広めていきます。

目次

序章　わたしたちについて

■ はじめに　02
■ LMC 制度とは　03
■ 提言　04
■ 出産ケア政策会議:これまでの活動概要　05

1 章　主な活動

■ LMC 助産師育成プログラムの開催【2 期】　06
■ LMC 助産師育成プログラムにおける「お母さんによる出産体験セッション」について　16
■ LMC 助産師育成プログラム(実践編)　18
■ LMC 助産師育成プログラム実践編受入れ施設一覧　19
■ LMC 助産師育成プログラム実践編を終えて　岡本愛　20
■ LMC 助産師育成プログラム実践編で学んだこと　伊藤志保　21
■ ママのねオンライン勉強会報告　22
■ ロビーチーム　活動報告　28
■ 自民党青年局にて LMC 制度の重要性を伝える　29
■ WEB チーム　活動報告　30
■ LMC 制度実現プラン事業展開(団体)　活動報告▸産院音々　31
■ LMC 制度実現プラン事業展開(個人)　活動報告▸暁～あかつき～助産院　中村暁子　35

2 章　メンバーによる活動報告

■ 論文・書籍等、会員執筆情報　39
■ 【全国】「語り継ぐ私のお産と生き方」イベント開催報告▸西川直子　40
■ 【北海道】人口 1900 人の村民になって活動した一年▸でいだらぼっち北海道　高橋宏美　41
■ 【静岡県】未来へつながる、つなげる活動▸お産ラボ　平田砂知枝　44
■ 【滋賀県】『共同助産所お産子の家』活動報告▸うみのこ助産院　金森京子　45
■ 【京都府】2021 年 5 月～2022 年 4 月の活動報告
▸出張さんばステーション聖護院海助産所　宮川友美　57
■ 【沖縄県】第 1 回沖縄のお産を考える会報告▸クバの葉助産院　橋本恵里子　58

3 章　これからに向けて

■ 今後の課題　60
■ メンバーからのメッセージ　61

4 章　データセクション

■ 本団体の情報　64
■ 代表紹介　65
■ 編集後記　66

はじめに

2016 年、Birth for the Future（BFF）研究会は、「女性中心のケア・妊娠期からの継続ケア」について 1 年間の検討期間を設けた後に、政策的な視点を持った活動をする仲間を募りました。その結果、妊娠初期から出産・産後まで継続的に関わるという助産師本来の役割が果たせていない現状を憂いている助産師たちと妊娠出産環境を変えたいと願う女性たちが、全国から集まりました。そこで、2017 年に「出産ケア政策会議」を立ち上げ、ニュージーランドのマタニティケア制度をモデルにした LMC 助産師制度の普及活動を行うという方向性を定め、5 年間（第 5 期の活動が終了）が経過しました。

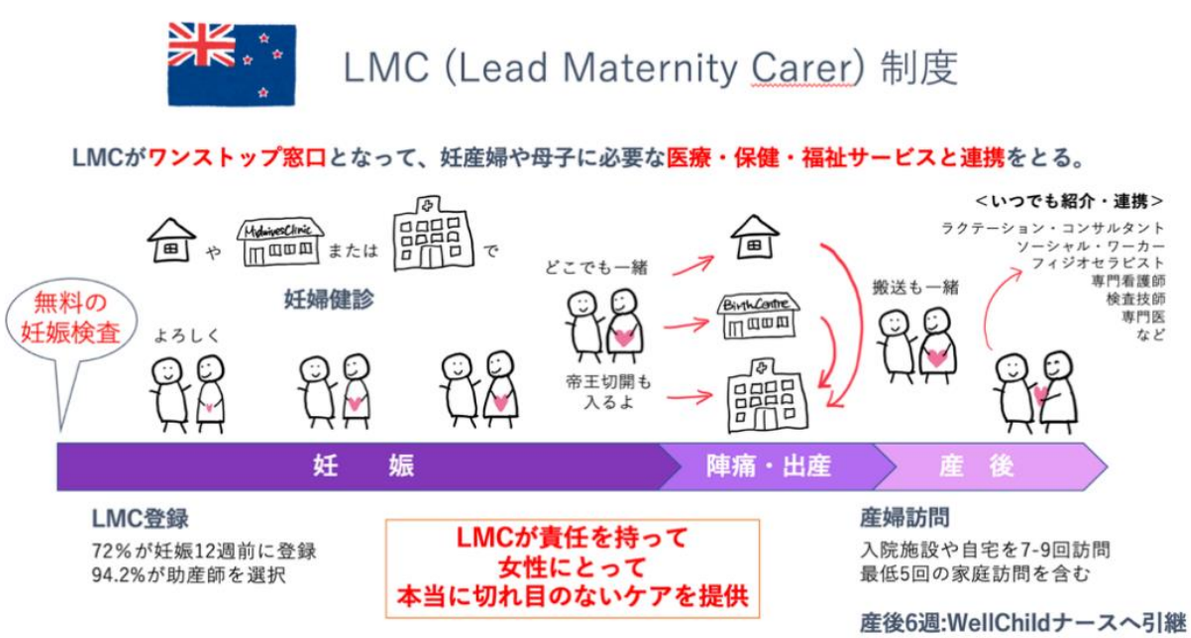
第 4 期の活動では、まず、継続ケアを実践する助産師の名称として、これまで「My 助産師」と表していましたが、「LMC 助産師」へと改めました。活動の目標は、この継続ケアを実践する助産師である LMC 助産師の認知度をあげ、LMC助産師を増やし、継続ケア保証制度の実現を目指すことでした。活動内容として、LMC 助産師育成事業、オンライン研修会・講演会事業、県・市へのロビイング事業の 3 つの事業を展開しました。しかし、課題として、LMC助産師としての働き方モデルを紹介することやそれをいかに推進するかということが明らかとなりました。

そこで、第 5 期（2021 年5月 1 日～2022 年 4 月 30 日）は、第 4 期と同じ目標を掲げ、まず、通常事業として①LMC 助産師育成事業（9 月から12月に開講）：59名に修了証を発行し、その内の数名がコロナ禍ではありますが、実践編の研修生として、各地域での助産院での継続ケア実践に取組んでいます。②講演会事業：3回開催し、351 名の参加がありました。 ③ロビイング事業：1）産後 1 年未満のローリスク初産婦を対象に「子育てアンケート調査」（有効回答 1,164名）を実施しました。2）自民党・若手議員を中心にした「Children First の子ども行政のあり方勉強会」の第 2 回（2021 年 2 月）と、2021 年 5 月の「子どもを産み育てやすい社会」を目指して行われている自民党青年局の勉強会で、当団体よりニュージーランドの LMC 制度の概要とその重要性について説明しました。 3）活動報告書（200 冊）の製本、印刷：正会員と賛助会員の希望者へ郵送するとともに、国会議員や地方議員、行政、助産関連団体や助産学教育機関等にも郵送しました。④Web サイトのリニューアル：9 月にリニューアル版を完成させることができ、本団体の活動目的やその内容の広報に役立っています。次に、新規事業として、「LMC 制度実現プラン事業展開」と銘打ち、LMC助産師としての働き方モデルの紹介と推進を目的に、事業展開する団体モデルケースとしての「産院音々」の支援、および、個人モデルケースとして 1 名の LMC 助産師実践者を支援することができました。その結果、LMC助産師としての新たな働き方モデルを会員内外に公開することができました。最後に、その他の事業として、地域におけるLMC助産師活動の活性化を狙って、正会員であり、沖縄県助産師会会員の有志の依頼により、当団体からLMC助産師活動に関する出前講座を沖縄県助産師会から発信しました。現地でのリアル開催および他府県に向けたオンライン配信を実施しましたが、沖縄県における助産師会の活性化にも繋がりました。

年度当初の計画通り、滞りなく第 5 期の活動を終えることができましたので、ここに「第 5 期活動報告書」としてまとめる次第です。出産ケア政策会議の活動へのご支援とともに、LMC 助産師制度の実現に向けてともに行動しませんか。

LMC 制度とは

出産ケア政策会議では、すべての妊産婦が自分の選んだLMC（Lead Maternity Carer／マタニティ継続ケア担当責任者）から、妊娠初期から出産・産後の継続ケアを受けるマタニティケア制度の導入を目指しています。このLMC制度はニュージーランド（NZ）のマタニティケア制度をモデルとしています（下記のイラスト参照）。NZでは妊娠すると、助産師・産科医・家庭医から、自分のLMCを登録します。現在、9割以上の妊婦が助産師をLMCとして選択しており、7割以上の女性が妊娠12週までにLMCを決定しています。途中でLMCを変更することも可能です。また、医師をLMCとして選んだ場合でも、必ず助産師も妊娠初期から出産・産後のケアを行います。LMCは、毎回の妊婦健診を行って、出産に立ち会い、産後6週までのケアを提供します。そのため、LMCは女性が望む、または必要とする出産場所へ出向いてケアを行うことが一般的で、バースセンターから病院への搬送など出産場所が変わる場合でも、産婦に付き添ってケアを継続することが可能です。また、9割以上の妊婦が助産師をLMCとして登録していることからも分かるように、合併症等ではじめから帝王切開が決まっている場合や多胎等でも、助産師が医師等と連携しながらLMCとして伴走し、妊娠初期から出産・産後を通してケアを行うことができます。このようなケアモデルを提供するLMC助産師のほとんどは独立した助産師（開業助産師）で、NZの助産師は、LMC助産師（約38％）と施設での交替勤務を行うコア・ミッドワイフ（約49％）という役割を、その時々のライフスタイル等に合わせて、流動的に変更しています。このような助産師による継続ケアによって、流産・早産・死産・器械分娩の減少等、さまざまな利点があることが分かっており、WHOは「ポジティブな出産体験のための分娩期ケア」ガイドラインで、助産師主導の継続ケアを推奨し、NZ以外の諸外国でも、このケアシステムの導入が推進されています。また、本会の調査でも、妊娠初期から出産・産後の同一助産師によるケアによって、育児不安や産後うつのリスクが減少することが分かっています。



提言

出産ケア政策会議は、政府などに対し、妊婦が、出産場所やリスクに関係なく、妊娠初期から出産・産後をとおして、妊婦が選んだ同一の助産師（LMC助産師）、または少人数の助産師チーム（その場合でもLMC助産師をひとり特定する）のケアを継続して受けられるよう保証する制度（LMC制度）の実現を求め、以下を提言します。

提言1 出産施設における継続ケアの保証

病院・診療所は、妊産婦が妊娠初期から出産・産後をとおして、LMC 助産師のケアを継続して受けられるように、交替制勤務を抜本的に見直し、妊産婦に合わせた働き方にしてください。まずは、助産師 1 人について 1 年に 1 人の妊産婦の継続ケアから始めてください。

提言2 産前産後ケア事業での部分的な継続ケアの保証

自治体は、まず第一歩として、産前産後ケア事業において、妊産婦が LMC 助産師による（部分的な）継続ケアを受けられるようにしてください。

提言3 LMC 助産師の質の保証

・都道府県は、出向システムを活用し、勤務助産師の助産所研修を推進してください。
・教育機関は、助産教育のカリキュラムを LMC 助産師を前提としたものに改善してください。
・全国助産師教育協議会は、ダイレクトエントリー助産教育制度の導入を検討してください。

提言4 妊婦が選んだ出産場所の保証

国や自治体は、合併症やリスクを問わず、妊婦が選んだ LMC 助産師のケアを継続して受けられるように、

・LMC 助産師のオープンシステム利用を推進してください。

・LMC 助産師と診療所・病院の連携システムを推進してください。

提言5 LMC 助産師の数の保証

すべての関係者は、妊娠初期から出産・産後をとおした継続ケアを実践できる自律した LMC 助産師を増やす取り組みを行ってください。

＊年間約 80 万人のすべての妊婦に、LMC 助産師のケアを提供するには、就業助産師約 3 万 5 千人のうち、約 2 万人が LMC 助産師になる必要があります（年間 1 人あたり 40 件とした場合）。

出産ケア政策会議：これまでの活動概要

【0 期】Birth for the Future（BFF）研究会 発足

・2016 年 2 月、現代表3名により **Birth for the Future（BFF）研究会**が発足

・約1年間の学習・検討を経て、出産ケア政策会議（研修会）を企画

【1 期】出産ケア政策会議始動（活動拠点：京都）

・女性と助産師の計 24 名が集まり、2017 年 5 月 20 日、**第 1 回出産ケア政策会議**を開催

・毎月、京都にて女性・社会・法律・経済等の研究者やロビイング実践者から学び、**女性を大切にする出産ケアのあり方**について討論

・参議院議員会館にて**成果報告会**、東京・京都にて**シンポジウム**を開催（2017 年 3・4 月）

【2 期】すべての妊産婦への継続ケアに焦点をあて活動を拡大

・新たなメンバーが加わり、すべての妊産婦への継続ケアの実現を目指して議論と活動を継続

・**国際助産師連盟（ICM）ドバイ集会**にて活動成果を報告（2018 年 9 月）

・参議院議員会館にて**成果報告会**、東京にて**シンポジウム**を開催（2018 年 3 月）

・**カレン・ギリランド氏（NZ 助産師会・前 CEO）招聘講演会**を全国 6 ヶ所で開催（2019 年 4 月）

【3 期】「My 助産師制度」実現に向けた活動の全国展開

・「My 助産師制度」の普及啓発活動

・広島・山梨・長崎で「ママのねプロジェクト」イベント等の開催

・北海道・長野・岐阜・滋賀・兵庫を中心に個々のメンバー活動

【4 期】継続ケアを実践する助産師の認知・増加、継続ケアの保証、制度の実現を目指す

・継続ケア実践助産師育成事業

・オンライン研修会・講演会事業

・国・自治体の議員、首長、職員へのロビイング活動

【5 期】「LMC 制度」として制度の普及活動やケア提供者の育成事業を展開

・座学・実践を含む LMC 育成プログラム、女性の出産体験談を聞く会の開催

・国・自治体の議員、首長、職員へのロビイング活動

・継続ケアに関する調査の実施

・会員外にも向けたオンライン勉強会、継続ケア事業に向けた検討会の実施

・ホームページのリニューアルや SNS 等による情報発信

LMC 助産師育成プログラムの開催【2 期】

赤塚庸子

私たちは、女性を大切にした出産ケアの在り方を政策及び制度面から支えるために、当事者である女性・家族とケアの提供者である助産師が協働して、出産ケアに関わる政策や制度、法律を見直し、女性のニーズと権利に沿った政策及び制度への転換を目指し、活動することを目的とした団体です。私たちが目指す具体的な形として「LMC 制度」があります。LMC 制度とはリスクの程度や出産場所に関わらず、自分の選んだ助産師（または少人数の助産師チーム）から、妊娠初期から**出産**・産後を通して継続的なケアを受けることを保証する制度です。産前・産後だけではなく、出産時における LMC 助産師によるケアを含むことが特に重要であると考えます。LMC 制度実現に向けてそれぞれの助産師が置かれた環境で、その一歩を踏み出すきっかけになることを目的として企画したものが LMC 助産師育成プログラムで、今年は第 2 期になります。

助産師は周産期を通してすべての「ケア」を行うことができる唯一の専門職です。同じ助産師がその妊婦に継続的に関わることで、「その人にとっての正常」を理解し把握することができるため、様々な変化や異常に気付きやすく、異常を未然に防ぐことや早期発見することにつながります。

日本では「LMC 助産師制度」のような制度がない現状で、多くの妊婦が定期健診等に通院しながらも、聞きたいことが聞けないなど不安な妊娠生活を送っています。たとえ健診時や入院中に助産師に会うことがあっても、毎回のように助産師が変わることで妊産婦は緊張や戸惑いを感じています。そしてひとりで陣痛に耐え、退院後は誰に助けを求めてよいかも分からず、気軽に相談できる人もいないという不安と孤独の出産・育児体験をしている母親も少なくありません。収束しないコロナ禍も加わり母親の置かれる状況は更に深刻さを増しています。また、増加する産後うつや子どもへの虐待など、重大な問題に関する話題を耳にしない日はありません。

日本の妊産婦死亡率や周産期死亡率の低さは世界に誇る数字を持っています。その一方で、このような妊産婦の社会問題が深刻化していることは、母子が身体的に安全であるという結果を追及してきた日本の周産期医療およびケアが、妊産婦や母親の心を置き去りにしてきた結果かもしれません。WHO は、妊娠や出産中にある女性がどのようなケアを受け、どのような体験をしたかという、女性にとってのケアと体験の質が、臨床的なケアと同等に重要であり、その両方が満たされてはじめて、その人にとって十分な結果が得られる、と発表しています（『ポジティブな出産体験のための分娩期ケア』医学書院、2021）。

今期育成プログラムの参加人数は、64 名の助産師と 14 名の助産師以外計 78 名で、1 期育成プログラムの内容の多くを踏襲する形での開催となりました。

第 1 回 2021 年　9 月　4 日　「助産哲学」　講師：ドーリング景子
第 2 回 2021 年　9 月 25 日　「自分自身のケアの振り返り」　講師：古宇田千恵
第 3 回 2021 年 10 月 16 日　「私が歩んでいる LMC 助産師への道」　講師：板垣文恵
第 4 回 2021 年 11 月　6 日　「LMC の実際を体験してみて感じること」
講師：産院音々の助産師、産院音々を経て開業した助産師
第 5 回 2021 年 11 月 27 日　「自ら開拓していく LMC 助産師への道」
講師：川畑萌子・浅井香穂・萩野瑞生
第 6 回 2021 年 12 月 18 日　「育成プログラム卒業生から自立への道」
講師：伊藤志保・大町真由子

LMC 助産師育成プログラム２期　第１回目　報告書

●日時：2021 年 9 月 4 日(土)19:30-21:30
●参加者：65 名(受講助産師 50 名、助産師以外 4 名、実践受入れ助産師 1 名、企画 10 名)
●プログラム：助産哲学 ［講師］ドーリング景子

第 1 回は、本プログラムに関わって下さっている講師陣の方々からの自己紹介の後、ドーリング景子さんより、助産哲学についての講義がありました。その後 4 事例に対して私たちはどう感じるのか、どのように動くのかに関するグループワークを行い、4 人の先輩方からのコメントを頂きました。

はじめに、『WHO 推奨：ポジティブな出産体験のための分娩期ケア』の中で、「Survive だけでなく Thrive」を目指すことが明記されていることの説明があり、私たちが目指すのは「女性がお産を通して力強く生ききること」へのケアだと話されたことが印象的でした。また、日本の出産の現場に本当の意味で暴力がないと言えるのか、という問いかけには、まだまだ多くの場所で女性の気持ちよりも医療者の保身や都合が優先される現状を思い浮かべ、自身が無意識のうちに加害者になっていないかを振り返り反省するとともに、産科医療の場を根底から改善していく必要があることを痛感しました。コロナ禍などの災害化で、安全という目的のためにと、いとも簡単に女性の権利が奪われてしまう現状を、せめて良しとしない気持ちは大事であろうと思います。また、「ガイドライン」は法律ではなく、それを使う「人」、助産師側にそれをどう使うのかが託されていることは、そのガイドラインの大小にかかわらずその通りだと感じました。

その後の 4 事例(分娩台、モニター、内診、バースプラン)に分けてのグループワークでは、現在普通に行われている上記のようなケアは、本当に女性のためのものか、という問いかけと共に、私たちはどう女性と向き合うのかも問われました。今まで正しいと思って行っていたことが、実は医療者のためであったことに気付き愕然としたという気付きや、参加者の経験を共有してもらうことで見える世界が広がる感覚があった、逆に、女性を大切にしたいのに現在の勤務先では難しく、それができない事へのジレンマを強く感じた、という声もありました。各事例に講師陣からのコメントを頂き、感じていたことの明確化や、個人として感じるだけでなく、このジレンマを社会に還元していく必要があることを立ち止まって考える時間となりました。

最後に LMC 制度についてのまとめがありました。LMC 制度は本当に女性にとって切れ目のないケアとなり、女性が本当に大切にされ、女性が本当に大切にされることを通して子どもを大切にできる循環を生む。助産師もこの中で幸せを感じ、現在、国で取り組まれている「医師の働き方改革」にも貢献できる。女性から見ても、助産師から見ても、そして医療全体から見ても、求められている制度であろう、と。最後に、今問われているのは、そして助産哲学の根本になるのは、私たちが「助産師としてどう生きるか」である、というメッセージが力強く届けられた第 1 回目のプログラムでした。

（文責：高山智美）

LMC 助産師育成プログラム２期　第２回目　報告書

●日時：2021 年 9 月 25 日(土)19:30-21:30
●参加者：63 名(受講助産師 48 名、助産師以外 1 名、実践受入れ助産師 6 名、企画 8 名)
●プログラム：自分自身のケアの振り返り ［講師］古宇田千恵

第 2 回では、事前に各グループで印象に残っているお産を SOAP に沿って紹介し振り返りを行い、グループ内で1事例に絞る作業を行っています。

はじめに、ケアの振り返りについて板垣文恵さんの印象に残っているお産を事例として、講師陣によるケアの振り返りが行われました。

ケアの振り返りの中では、当事者を責めたり否定するなどの発言はなく、本音で話すことができるような雰囲気がありました。仲間とともにお産を振り返ることで、そのときの思考パターンや自分の癖などを発見していく板垣さんが印象的でした。自分のケアを仲間と振り返ることで、自分自身を成長させ、ケアの質の向上につながるのだと学びました。

その後に、グループワークで板垣文恵さんの振り返りを聞いての感想、グループの事例を振り返った際の視点の違いや事例について再検討などの時間が設けられました。

受講生の声として、仲間と振り返りをすることで、いろんな意見が聞けて事例を通して助産師としての学びを深めることができることが嬉しいと述べられる方もいらっしゃいました。また、実際に職場でお産の振り返りを実施されている方からは、上司の発言が気になり本音で振り返ることが出来ていなかったという気づきをされている方もいらっしゃいました。その中で、お産の振り返りの際に医療者側の視点だけでなく、お母さんの気持ちについて考える視点を加えることでさらに振り返りを深めることが出来るのだと学びを共有して頂きました。

最後に、本日のまとめがありました。出産の進行は母親の感情に左右されるため、母親の安心できる環境や信頼関係作りが大切なのだと学ぶことが出来ました。また、母親の感情、神経内分泌系、身体の相互作用による複雑で繊細な生理学的プロセスを混乱させることなく、促進させることであり、そのためには助産師自身が自分の感情をいつも丁寧につかみ取る必要があるという気づきがありました。そして、お産の振り返りは一人ではなく、仲間でやることで、いろんな視点から振り返ることができ、一人ではなく仲間の学びになることを学びました。

産婦の内側で起こる感覚を掴むためには、助産師自身がいつも内側の感覚を掴んでいく必要があるという話しを聞き、これからはもっと多く自分自身との対話を大切にしていこうと感じたプログラムでした。

（文責：平山真実）

LMC 助産師育成プログラム２期　第３回目　報告書

●日時：2021 年 10 月 16 日(土)19:30-21:30
●参加者：60 名(受講助産師 44 名、助産師以外 1 名、実践受入れ助産師 5 名、企画 10 名)
●プログラム：私が歩んでいる LMC 助産師への道
[講師]板垣文恵(出張さんばステーションうるま 助産院むすびや)
[ファシリテーター]松浦照子、赤塚庸子

第 3 回は、沖縄から板垣文恵さんと、板垣さんのサポートメンバーとして関わっている 4 名の方から、LMC 助産師としてどのように変化していったのかを発表して頂きました。

まず板垣さんから、分娩開業後にチームとして活動が軌道に乗るまでの経緯をお話頂きました。「まだプロセスの渦中にいるが、少しずつ工夫をしているところである」こと、「お産に携わり、妊産婦さんから多くのことを循環して頂き、サポートメンバー自身にも前向きに LMC 助産師として関わろうとする変化がおきている」という報告がありました。沖縄版の Find Of Midwife サイトを作りたいという夢も語られました。

サポートメンバーのお一人である橋本恵里子さんは「分娩開業という対等な立場にない限り、板垣さんの負担を取り除くことはできない。」また「私が心地良く、私が妊産婦さんのこだわりを叶える自宅での出産のお手伝い、という考え方から、女性の人生での大事な期間に寄り添える働き方をしたい、と変化していった。」こと、そしてメイン助産師として気負う中で妊婦さんより「何かをしようとせず、私とこの子に気持ちを寄せて、傍にいるだけで良い。」と声を掛けられたことで、何者かになろうとしていた自分に気付き、その後対人間としての関わりができたことをお話して下さいました。

比嘉可苗さんからは、板垣さんが主導されている LMC 助産師の学びに参加する中で、総合病院では中々経験を積むのが難しい継続ケアを深めるために退職し、助産院での研修に出られるまでの経緯が語られ、「暮らしの中に助産がある生活、大切に丁寧に触れさせて頂いている。」と研修の様子を伝えて下さいました。高山智美さんは「サポートを重ねる中で、自分の作っていた枠から出ることができた。板垣さんの元でメイン助産師の経験を重ねたことで、不安もあるが、妊産婦さんに必要とされていることから今後開業をしていく決意に至った。」と語って下さり、西平美幸さんからは「できることに目を向けたら自分も動け出せると考えられるようになった。」と言葉にされました。

質疑応答では、チームで動く際に工夫されている部分(謝礼・保険等)をシェアして頂きました。病院勤務の中で LMC の取り組みに対しジレンマを抱えている方へは、やれないできないと思っているだけかもしれない、開業したいと公言すると道が開けるのではないかとエールを送って頂きました。

全体の感想では、沖縄のメンバーが楽しそうにやられていることに勇気を貰った半面、自分の立場に置き換えると不安だったり頼ってばかりではいけないという気持ちも聞かれました。それに対し沖縄からは、「自信があるわけではないから頼る気でいる。自信がなくても押し出される

時がくるかもしれないが、その時はやるしかない。」「命を一人で背負うことはできない。経験がないなら先輩を頼ればよい。」「命への責任は妊産婦さんと助産師に半々にある。背負うのではなく正直であろうと思う。」とお答え頂きました。

私のグループでは、全体の感想と同様に、沖縄のメンバーが和気あいあいとされていることに対して、楽しそう、羨ましい、という声が多く聞かれ、私は、ピンで動ける助産師が少なくても、横の繋がりがあることで LMC の実践に向けて着実に動き出していることが実は凄いことなのだと逆に気付かされました。その横の繋がりを構築したり、後輩助産師達に LMC としての目覚めを与え続けているのが板垣文恵さんです。板垣さんが自分の助産院を拡大するより、沖縄の地に、中学校区に一人ずつ開業助産師がいることを目指し後輩育成をすることに使命を感じて、全ての責任を負いながらメイン助産師に育て上げていこうとしている働きに対し、改めて存在の大きさを感じました。

また自宅分娩での NCPR 時の対応に不安との感想も出ていたため、不測の事態における準備・判断・対応をどうなさっているのか、開業助産師の皆さんのリアルな現場をシェアして頂ける機会があると、漠然とした不安から、その為に自分が今できることが明確になり、一歩を踏み出せるのではないかと感じましたので、今後そのような場を希望致します。

（文責：儀間さやか）

LMC 助産師育成プログラム２期　第４回目　報告書

●日時：2021 年 11 月 6 日(土)19:30-21:30
●参加者：53 名(受講助産師 38 名、実践受入れ助産師 4 名、その他 3 名、企画 8 名)
●プログラム：LMC の実際を体験してみて感じること
[講師]産院音々の助産師、産院音々を経て開業した助産師
[ファシリテーター]松浦照子、赤塚庸子

1. 産院音々の施設紹介(滝澤恵美さんより)

医療機関の施設敷地内にて、助産師の新しい働き方を実践している産院。
それぞれの妊婦さんに担当助産師、サポート助産師(2 名)を決めて、継続ケアを実施。勤務の変更なども各自で自由に決め、事務作業なども自らで行う。助産師主導の継続ケアをチームで行うことで、助産師と医師が協力し助産師主導のチームでの継続ケア体制を確立し、全国のモデルケースとなることを目指している。

2. 畑村弥生さんより

産院音々との出会い、産院音々での日々や開業された経緯の紹介。
継続ケアをおこなうことによって、妊婦さんの心のみならず分娩経過がわかり、医療介入への考え方が変化した。サポート助産師を変えてほしいという妊婦さんとのエピソードを交え、ありのままの自分で話すことが、対話には必要なのだという話がされた。

また、医療機関で勤務していたころと比べ、人と人とのつながりが深まった。現在の方が安らぎや充実感が得られるようになり、だんだんとご自身の考え方や生き方が変化されたと。
「生き方そのものが変わった、大変なこともあるが、幸せなお産を見るとやめられない」と LMC 助産師の魅力を話された。

3. 滝澤恵美さんより

産院音々の初動に関して、医療機関に勤務していた時とのギャップ、産院音々や自宅分娩での気づきについて話がされた。
滝澤さんと松浦さんは、処置の主体は誰にあるのか、検査はどう行うべきかなど、議論を交わしながら現在まできた。赤ちゃんの採血の場面では、滝澤さんは医療機関で行っていたそれと同じように別室で行っていたが、松浦さんはお母さんの目の前で、お母さんと赤ちゃんが安心できるように実施していた。その後、実際に赤ちゃんの処置を目の当たりにしたお母さんが涙されたことで、医療機関での当たり前について考えさせられることがあったと話された。

また、お母さんの目の前でいろいろな意見や選択肢を助産師同士で交し合うこともあると。それはお母さん自身がいろいろな意見や選択肢があるのだということを感じとることにつながっていく。実際に、その場面にいた母親は、赤ちゃんへの授乳方法について自分で考え、決断がで

きたという。自分が心地よいと感じる選択をすることの大切さに気付けたというお手紙や、実際に生き方が変化した産婦さんがいたことなども紹介された。

最後に、自宅分娩でのサポート助産師の確保の難しさや、NCPRなどの学習を深め安全なお産ができる環境を作ろうと励まれていること、助産院に対する正しい認知を広めたいという思いをお話された。

4. グループワーク、感想のシェア

今回より、新しいグループでのワークがなされた。初めに、松浦さんより「自分の意見に素直になって発言を」という導入がされた。

各グループから、継続ケアをおこなうことでお母さんのみならず、自らの生き方が変わる LMC 助産師の魅力を再認識する声や、助産師にはともに意見が交わせる仲間やチームが必要だという声が聞かれた。

滝澤さんの先天性代謝異常の検査での気づきから、同じように医療機関での当たり前に疑問を抱いたり、自身の対応に反省した、という意見もあった。

また、収入面では医療機関での勤務する場合よりも下がる不安もあるといった意見も出たりと、助産師個人の働き方や人生について、それぞれが考える時間となった。

5. 受講の感想

産院音々の皆さんのやり取りを拝見し、助産師それぞれが自立しながらもチームとして継続ケアをおこなうことで、お母さんたちへのケアの質の向上、助産師のやりがいにつながり、ゆくゆくは助産師個人の人生をも変える力があるのだと、非常に響くものがありました。

女性が他者から大切にされ、ありのままの感情を受け止めてもらえる経験は、大きなパワーを生み出し、生き方をも変える。妊娠出産の際に感じる気持ちを、女性は一生抱えて生きていく。

そのような尊い時間に寄り添える助産師という仕事が大好きだなと思いました。

そして今回、新しいグループでワークに取り組む中で LMC 助産師を目指す仲間の温かさも感じました。初めて話す人もいるなかで、どんな意見を持っていても受け入れられる安心感は、とても心地よいものがありました。

助産師には仲間が必要であるという講師の方々からのメッセージをみんなが感じ取られたプログラムとなったのではないと感じています。

このような温かいプログラムをご準備いただき、参加できていることに感謝の意を込めて。

ありがとうございました。

（文責：安江さくら）

LMC 助産師育成プログラム２期　第５回目　報告書

●日時：2021 年 11 月 27 日(土)19:30-21:30
●参加者：50 名(受講助産師 34 名、助産師以外 1 名、実践受入れ助産師 2 名、その他 5 名、企画 8 名)
●プログラム：自ら開拓していく LMC 助産師への道
[講師]川畑萌子、浅井香穂、萩野瑞生(ゆりかご助産院　第1～3期新卒研修生)
[ファシリテーター]赤塚庸子、松浦照子

最初にゆりかご助産院の赤塚さんにインターンを始めた経緯をお話いただいた後、研修生の３名の方にゆりかご助産院での経験を経て、今どのような施設で助産師をしているか、研修で培われた助産観がどのように生きているか、今後の展望などをお話しいただきました。最後に古宇田さんよりカナダの教育システムを紹介していただきました。

1. 赤塚庸子さんより

2018 年より新卒助産師のインターン制度開始。交換日記による意見交換や知識や学びの実践の確認、助産ケアや看護処置などの経験チェック表を作成し技術習得レベルを確認、ポートフォリオを記載してもらい一緒に振り返りを実施。勤務は基本週休2日で午前勤務、お産のときは助産院に来る、入院中に1回は当直をすることで年間50例程度のお産を経験。研修会への積極的参加を促し、参加費や交通費は助産院負担。1期生はニュージーランドへ研修も。同じ助産師としてフラットな関係を意識して自分の率直な意見を述べることを促す。経験年数の多い助産師もインターン生からの学びがあり win-win だと感じ、若い力に光を感じる。インターン10年継続を目標にしている。

2. 川端萌子さん(1 期生)

第三次医療機関でバリバリ働ける助産師になろうと思っていたが、助産実習の1～5例目をゆりかご助産院で経験したことがきっかけで、ゆりかご助産院でインターンを決意、助産院の魅力にどんどんはまった。インターンを経て現在第三次医療機関に勤務し3年目。最初は葛藤もあったが、「自分が主体だと自分のやりたいケアができず苦しくなるが、お母さんに思いを馳せると必然的に自分の我がなくなり、ブレずに女性と向き合えるようになったし、お母さんたちと関係性を深めることができた。それで病院でもどこでも同じ関わりができるようになり葛藤はなくなってきた気がする。」「開業しかないと思い苦しくなった時期もあったが、女性が主体という視点で捉えると開業も一つの手段だと思えるようになった。」「ゆりかご助産院で学んだことは『自分なりの助産観』だと思う。ゆりかごの時から続けているノートには自分なりの助産観と学びの種がつまっている。」「現在、実践編として継続ケアを学んでいる。開業は一つの手段だが、いろんな方が幸せになれるように、ゆりかご助産院で学んだ種に水と栄養を与えて大切に育てていきたい。」

3. 浅井香穂さん（2 期生）

1年目は第二次医療機関、現在はゆりかご助産院の嘱託医療機関に勤務。総合病院では妊娠期は外来の助産師、分娩は分娩担当の助産師と分業制になっていてその後の情報が上がってこない環境であることに助産院とのギャップと葛藤を感じることがあった。しかしゆりかご助産院で学んだ相手に思いを馳せること、少しの時間でも相手を知ろうと思って声を掛けたり、限られた環境下で今できる関わりをしようと思う土台の部分はゆりかごの時と変わらなかった。今は、助産師が外来に行きお産までに何度か顔を合わせられるし、産後やその後の健診まで継続して診ることができる自分がやりたかった環境で働くことができている。まだまだ学びの途中だが、ゆりかご助産院で関わった世界があることを知っているからこそ、もっと女性と赤ちゃんのためにという想いで働くことができている。

4. 萩野瑞生さん（3 期生）

助産師を目指したときから、女性の産む力、赤ちゃんの生まれてくる力に感銘を受け、いずれは開業したいと思っていた。ゆりかご助産院でのインターンで、自分も相手も素になることで対等な関係性を築けること、その中で女性と一緒に乗り越えていくことを学んだ。今の勤務する病院では相手の想いに気づいていながらも、それを尊重できないことにギャップやもどかしさを感じることもあるが、その一瞬に寄り添い、声をかけたときの表情や言葉はゆりかごでの経験を活かせていると感じる。第三次医療機関を選んだ理由として正常産から異常になるときに対応できなかったこと、病院で産んだ方の想いと経験を知りたかったことがあった。助産師として女性とどうかかわるか。助産師とは何をする人か。それは女性を尊重し対等に関わることにたどり着く。これはゆりかご助産院から学んだこと。助産師という仕事に巡り合えたことの喜びは辛い想いをしても変わらないし楽しくてしょうがない。いずれは開業したい想いは変わらないし、年数は関係ないと沢山の方が声をかけてくれたのでいいと思ったタイミングで次の扉をたたくと思う。

5. 古宇田千恵さんより　カナダの教育システムについて

世界の中の教育に触れることで、世界標準に近いものを学び日本の教育の遅れを知る。ダイレクトエントリーとは、看護師免許がなくても助産教育を受けることができるシステムで、これが世界のスタンダード。カナダ・オンタリオ州では全員が開業助産師であり、継続ケアをしないことは違法である。助産師教育プログラムでは60例以上の出産の実習で、うち、40例はプライマリーケア提供者として分娩介助を行う。10例は自宅出産でそのうち5例はプライマリーケア提供者として分娩介助を行う。10例は病院出産。30例は妊娠、出産、産後6週にわたる継続ケアを行う。4年間の助産教育。学生は24時間のオンコール体制で臨床プリセプターがつき2年半を過ごす。日本とは違い実践家にぴったりとくっつくことで学ぶのが世界のスタンダードである。お産はノーマルで健康的なできごととして捉え、助産師とは「女性とともに」を意味する。

（文責：大島智美）

LMC 助産師育成プログラム２期　第６回目　報告書

●日時：2021 年 12 月 18 日(土)19:30-22:00
●参加者：58 名(受講助産師 45 名、助産師以外 3 名、その他 2 名、企画 8 名)
●プログラム：育成プログラム卒業生から自立への道
［講師］伊藤志保、大町真由子　［ファシリテーター］松浦照子、赤塚庸子

1. 伊藤志保さん(1 期生)

半年間の長期研修をくさの助産院で経験。初産婦と経産婦 2 名の継続ケア(妊婦健診、産後の入院、退院後 3 日、2 週間、1 カ月健診、乳児健診)を経験した。自らの感覚を用いて、レオポルド触診法や超音波検査などを経験できた。妊婦健診で母子と関係を作り、胎児が元気であるという確信と信頼を持ち、安心して出産を迎えることができるという感覚を持てた。病院勤務では出産時に初めて対面する産婦の検査データからお産の進行などを判断していたが、その点が大きく違った。助産院では入院時と必要時のみモニターを装着し、他はドップラーで観察する、陣痛の最中に産婦さんと外出、散歩できる、産婦の望む体位での出産ができる、分娩第 3 期にアトニンは使わなくとも子宮が収縮し止血されることなどを経験した。陣痛の自然な周期は、一見微弱にも見えたが、胎児にストレスがかからないようなペースであると尊重され、胎児娩出の介助も首が娩出された後、次の陣痛に合わせて、ゆっくり胎児が自分で出てくるのを支えるという介助だった。創部について、自らが縫合の必要性を判断し、治癒過程に責任をもち、観察や判断をすることを学んだ。静岡市では分娩を取り扱う助産師が 6 名(施設 4 名、出張 2 名)いて、開業助産師同士に加えて、病院勤務の助産師や医師との良いチームワークが取れていた。今後は、助産院や出張開業している先輩助産師の元で学び、自立を目指したい。嘱託医との連携に向けた準備、器材設備の準備など考えていきたい。自分らしく、楽しく日々感謝をして生きていきたい。実践編に進む仲間に伝えたいことは、まずは継続ケアを体験して欲しいということ。その学びは、病院での勤務に戻ることになったとしても意味があることである。

2. 大町真由子さん(1 期生)

宮川助産師さんのもとで研修をした。妊婦健診に同行させてもらいながら、妊婦さんの性格や家族関係を把握し、本当のケアとは何かを見ることができた。今まで関わってきた方は、その時々でしか相手の方を見ることができないので、指導型となってしまい、こちらからの情報提供が中心だった。こちらが何かを言うのではなく、その時の環境で空間が作られていくという、本当のケアを体験できた。助産師の緊張が産婦さんに影響を与えること、助産師が楽しむ大切さをお母さんの立場にある方からも聞くことができ、自分らしさを出すこと、そして助産師がその場の空気感の中の一部になっていくということがわかった。妊娠中から関わり、出産に近づくにつれて、妊婦と胎児と家族が危機を迎え、乗り越える局面があることや、その際の助産師のかかわり方も学ぶことができた。妊娠中に胎児との交流を持つことの重要性も学んだ。出産直後、赤ちゃんに対して心から可愛いという気持ちを示すお母さんが印象的だった。母乳育児について、少量でも児の体重が増加することを体験し、生理的な経過について学ぶことができた。

（文責：遠藤美千恵）

LMC 助産師育成プログラムにおける「お母さんによる出産体験談セッション」について

中野裕子

【出産体験談セッションとは】

第2期 LMC 助産師育成プログラムにおいて、継続ケアを受けた5名の母親による出産体験談を聴く機会を設けました。また今期より母親だけでなく（内1回は父親も）、LMC 助産師にも同席してもらうことで、それぞれの立場から継続ケアを通じて培われる関係性や、助産師主導のお産についてより具体的な理解を深めてもらう機会としました。

5名の母親の出産場所は、前回の出産も含めると助産院・自宅・病院・クリニックと様々でした。話し手の皆さんにはセッションの趣旨等あらかじめお伝えしていましたが、当日は捉われることなく自由に語って頂けるようにしました。

研修生には体験談を聞いた上で「日々自分が行っているケア」を振り返ってもらい、その感想を提出してもらいました。

＊参加者人数には研修生の他に、助産師以外の立場の方（母親等）や企画メンバー、実践編の受け入れ先助産師の数も含まれます。

第1回　開催日：2021 年9月10日（金）　参加者：55名

【話し手】母親：Ａさん（第２子）、 LMC 助産師：　宮川友美（海（まある）助産所）

【研修生の感想】

妊娠中の女性にどうかかわっていくのか、援助する助産師の姿勢として学んだことは、妊婦さんがどう妊娠経過に向き合っていくのか？どう試行錯誤していくのかを見守るということでした。自分は今までは、妊娠経過が順調かの判断をして、妊娠中の過ごし方や分娩経過について保健指導しなくてはならないということが大部分を占めていたので、まったく視点が違うということに気がつきました。そして、助産師の継続的ケアによって、妊婦さんが自分の本当のニーズに気が付き、出産に向かうことができるという、妊婦さんにもたらす意味も学ぶことができました。

第2回　開催日：2021 年10月1日（金）　参加者：57名

【話し手】母親：Ｍさん（第３子）、 LMC 助産師：　板垣文恵（助産院むすびや）

【研修生の感想】

Ｍ さん、貴重なお話をありがとうございました。ご自身が嫌なことや大切にしたいことを、助産師に聞かれたのではなく自分から出せたこと、考えを深められたというお話が印象に残りました。これまでは、『どのようなお産にしたいのか、どうしたいと考えているのか』を相手から聞き出すことに意識を集中してしまいがちでした。女性が自分のタイミングでお産への思いや考えを一つ一つ明らかにしていく過程を大切にしたいと感じました。

第3回　開催日：2021 年10月22日（金）　参加者：64名
【話し手】母親：Ｈさん（第３子）、 LMC 助産師：　中村暁子（暁～あかつき～助産院）
【研修生の感想】
　貴重な体験をひとつひとつ思い出して、伝えにくいようなことも言葉にして、丁寧にお話してくださって、大変ありがたく思いました。言葉一つ一つが突き刺さりました。3 人目の出産を経て「気持ちを解放」できたとおっしゃっていたのが今回のキーワードのような気がしました。お産中、産婦を五感で感じて観るようにしていますが、産婦も五感で感じて助産師を観ているんだということに気付かされました。気持ちの解放は気持ちのいいお産に繋がるのではないかと思います。それは LMC だからこそ実現できる支援ではないかと思いました。このような関わりができる助産師でありたいと思いました。大変貴重なお話をありがとうございました。

第4回　開催日：2021 年11月12日（金）　参加者：51名
【話し手】母親：Ｍさん、 父親：Ｙさん（第４子）、 LMC 助産師：赤塚庸子（ゆりかご助産院）
【研修生の感想】
　貴重なお話ありがとうございました。「導くのではなく、自分（妊婦さん自身）の歩む道を伴走してほしい」という言葉が印象的でした。こうすればお産がうまく進む、という経験が積み重なるたびに、妊婦さんに対して「こうあってほしい」と理想を押し付けてしまいがちですが、助産師の役割とは本来そうであってはいけないのだなとハッとさせられました。また、出産体験を通して、女性だけでなく男性も「親」になることができるのだと感じました。出産に対し、改めて神秘性やパワーを感じたと同時に、親になれなかった男性にどうアプローチしたら父性を目覚めさせることができるのだろうという課題が生まれました。

第5回　開催日：2021 年12月3日（金）　参加者：54名
【話し手】母親：Ｔさん（第４子）、 LMC 助産師：　松浦照子（松浦助産院）
【研修生の感想】
　Ｔ さんのお話を伺った時は 4 人目をご妊娠中だったので、その後どのようなお産をされたのかとても気になっていました。今回お話を伺えてとても嬉しかったですし、Ｔ さんが目の前にいらっしゃってビックリしました！お話の中で「自分自身が自分のことを知り自分の軸が分かると相手もわかる」ということにハッとし、目から鱗でした。そういう発想はなかったです。自分自身に真剣に向き合ったことはあまりないなと気づかされました。自分の感覚を自分で分かっているからこそ相手の感覚に気づき相手のことがよくわかる、私もそんな関係性を女性と作っていきたいです。そんな関係性を持つお二人がとっても羨ましく、その関係性はどういうことなのか私も体感したいです。やはり、どこの場所で産むかではなく、誰と産むか、女性と助産師が心をオープンにして信頼できているか、パートナーシップが鍵だと改めて感じました。女性が持つ生命体としての、身心の健やかなる場所を感じ取るアンテナを持つそんな助産師になりたいなと思いました。また本日も、妊婦を守ることではなく、私たち医療従事者を守ることに重きを置かれているなと感じました。妊婦の声が届かない社会は恐ろしいです。出産を機にその後の子育て、家族との関わりがポジティブになれば、社会全体がポジティブな方向へ進むことを信じています。

LMC 助産師育成プログラム（実践編）

赤塚庸子

6 回に及ぶ座学とは別に、実践編として東は埼玉、南は沖縄まで全国 14 か所の開業助産所で継続ケアの実践をおこなう機会を設けています。

実践編では受け入れ助産師さん方の多大なるご協力のもと、妊娠期から出産・産後まで継続して一人の妊婦を受け持ち、開業助産師とともに助産ケアを展開していきます。また時間や距離などの制約がある実践編参加希望の受講生は半日または 1 日の助産所見学を行います。

今期実践編を受けた方は 10 名です。受講生には毎回レポートを提出していただいています。100 本以上に及ぶ詳細なレポートの中からいくつかの抜粋をご紹介します。

・・・・『健診を重ねるごとに、S さんの妊娠出産に対する思いに触れて感動しています。なぜ助産院を選んだのか、家族はどう思っているのか。今回はどんな風に産みたいか。形式的に聞き出すのではなく、自然と出てくる会話を共有できるのは継続ケアだからこそと実感しています。同時に「助産とは何か」「お産とは」「寄り添うとは」といった助産哲学的な部分を考えてばかりです。その時によって答えが違ったり、迷ったり。助産師としての自分と向き合うことができていることも実践編へ進んだからだと思いました。』(35 週の妊婦健診のレポート：3 次医療機関勤務 T さん)

・・・・『開業助産師が、女性の身体に触れていた時、女性は「先生の手、気持ちいい。」と言っていた。やはり、すべての女性に共通することだと思うが、日頃の生活から気を張って過ごしており休まる時がないため健診の時に身体に触れることは緩む時間になると思った。また、身体に触れることは女性と助産師の関係づくりにつながると思った。他にも女性の身体に妊娠中から触れておくことで、その女性の特徴のようなものを把握することができ、きっとお産の時に役立つのだと思った。今回一緒に関わらせていただく方ははきはきと明るい方。これから一緒に過ごさせていただけることが楽しみ。』(妊婦健診のレポート：3 次医療機関勤務 K さん)

今日はお腹が前回までと比較して一気に大きくなり胃が圧迫されるように・・・でもご自身で身体の変化に対応できる方なので、それ以上のヘルプを求める感じでもなかったです。妊婦さんは穏やか～な表情で。お腹も少し冷え気味だけど、柔らかくて。開業助産師さんが何気なーく助言されていて。旦那さんとの出逢いの時のお話、自分が育ってきた環境、それに対する想いや生活のこと。確かにこの関わりをしていくとバースプランはいらない、ということが分かった気がする。本当にひとりひとり距離感が違う、関わる月日や回数によっても。その時その時に合わせていけばいいんだなと。チームの一員になって、少しずつ溶け込んでいる気がする。担当妊婦さんと第一子がとても愛おしくなってきています。(30 週妊婦健診のレポート：クリニック勤務 N さん)

LMC 育成助産師プログラム受講のメンバーが実践編のなかで、実際に現場でリアルな継続ケアを体験することで座学編での学びをより深めることにつながっています。またこのプログラム受講をきっかけに LMC 助産師として自立する道に進んだ受講者もいます。

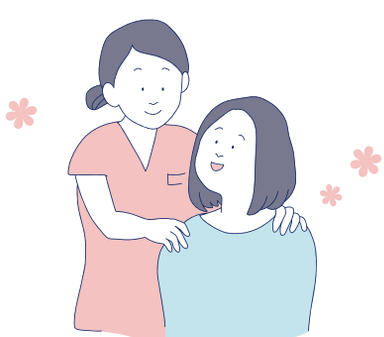
LMC 助産師育成プログラム実践編受入れ施設一覧

LMC 助産師育成プログラムも2期となり、実践編では埼玉から沖縄まで、以下の14か所の開業助産所が受け入れを表明してくださっています。
受け入れ先と、受講生の希望を調整し、実習施設を決定しています。
第 1 期・第 2 期では実践編に進むか否かは受講生が判断していましたが、第 3 期からは全員実践編もセットでの受講となります。
受け入れ施設の皆様、ありがとうございます。

①静岡県　くさの助産院
②埼玉県　たきた助産院
③山梨県　出張さんばステーション日野春☀松浦助産院
④長野県　産院音々「愛と平和の産婆組合」
⑤岐阜県　助産院　なお
⑥岐阜県 出張助産師堀江豊子
⑦岐阜県　ゆりかご助産院
⑧愛知県　かなや助産所
⑨愛知県　ふくろう助産院
⑩京都府　出張さんばステーション聖護院　海助産所
⑪大阪府　岸本助産院
⑫福岡県　たのしまる助産院
⑬福岡県　助産院笑望（えみ）
⑭沖縄県　出張さんばステーションうるま　助産院むすびや

第 1 期
実施施設：①②③④⑦⑧⑩⑫⑬⑭
期　　間：2021 年 3 月から 2023 年 3 月まで

第 2 期
実施施設：①②③④⑦⑧⑨⑩⑫⑬⑭
期　　間：2022 年 1 月から 2023 年 9 月まで



LMC 助産師育成プログラム実践編を終えて

岡本愛

継続ケアが大切であることは看護学校や助産学生の時にすでに学んでいると思います。資格を取得し、現場で働く中で自分の居る場所で業務をこなし、病院勤務という立場の中で継続ケアをし、地域につないだらOKという日々を送っていました。LMC助産師育成プログラムを受け、自分のやりたいことにまだ早いと蓋をしていましたが、開業準備の一つとして実践編を申し込みました。

妊娠5か月の妊婦さんと出会い、関係がスタートしました。助産院での健診は毎回旦那さんもみえ、いろんな話をしました。会うたびに、どんな方たちなのか。夫婦関係、家族のバランス、考え方などいろんなことを知っていきました。病院では時間を気にして産婦さんとゆっくり話すのには限界がありましたが、助産院での健診は1時間当たり前でした。

担当さんは健康体で大きなトラブルなく妊娠後期まで来ました。産休にもうすぐ入ろうとしたときの健診で急に逆子になりました。なんで？と思いましたが、まだ週数に余裕もあり、逆子体操などの話をして、2週間後、逆子が治っていました。二人でママが今まで仕事が忙しかったからぐれたのかな？など話しながら笑っていました。2週間後の健診で再び逆子に！！これには驚きました。この時期に逆子になるのはどんな理由があるのだろう？二人でいろんな話をしながら逆子が治らなかった場合、経腟トライするのか？帝王切開にするのか？そんな話をしながら逆子の経腟分娩のビデオを一緒に見て、産婦さんは迷わず経腟トライすることを選びました。この時、逆子の経腟分娩を経験したことがない私のほうが不安だったと思いますが、産婦さんが「産める気がする！」と発言があり、その言葉に私のほうが安心したのを覚えています。

予定日を過ぎても陣発せず、内診所見も前回の健診より悪くなっており、ベテラン医師の見立てではこのまま待っても産まれない気がする。とのことで急遽、夫婦に丁寧に説明し、2日後に帝王切開になる運びとなりました。急なことで受け止めきれず涙する産婦さんの横で助産師としての感情、戦友としての感情が入り混じっていました。ただただ一緒に受け止め、きっと赤ちゃんからの何かしらのメッセージでは？など話をしました。

クリニックの理解もあり、帝王切開も立ち会わせていただけることになり、無事出産を見守ることができました。「岡本さんがいてくれて本当によかった！心強かった！」と言ってもらえたことが継続の醍醐味です！！

産後の入院中も専属で指導、退院後も不安なことはメールで聞くことができ、聞く人が固定されているため、困らない、迷わない。病院では指導内容にばらつきがあり、あの助産師さんはこうやって言っていた！など伝え方や受け取り方に違いが生まれ混乱する産婦さんが多くいました。

継続ケアは信頼関係が構築され、不安を軽減することができます。人は悩んでいるうちにインターネットで調べ始め、鬱へ移行するケースがありますが、すぐ聞ける窓口があると、その負のループも防ぐことができます。病院で働いていた時のジレンマはこの実践編での継続ケアを経験したことにより、私のやりたいことはこれだ！と改めて思わせてくれました。病院で勤務していた時は、産ませてください！となぜかお願いされ、医者、助産師主導で病院の言うことは正しいと思い込んでいる産婦さんがほとんどでした。女性は自分で選択し自分で産む。当たり前のことが当たり前にできない世の中ですが、妊娠経過が良好だといいお産へと。いいお産はいい育児へとつながっていくため、今後も自分にできる継続ケアを精一杯やっていきたいと思っています。

助産師としてそばで産婦やその家族を支え見守り、必要な時に必要な分だけ手を差し伸べる。これが継続ケアだと改めて感じました。そのためには産婦側の意識も変えていかなくてはいけない時代だとも感じました。私自身、成長できた経験でした。

LMC 助産師育成プログラム実践編で学んだこと

伊藤志保

私は千葉県の総合病院産科に 6 年間勤務していましたが、ずっと助産師の働き方をもっと知りたい、助産院というものを知りたい、と願っていました。しかし病院勤務は休日も含め滅私奉公のように忙しく、また私には助産院とのコネクションもなく、月日は過ぎて行くばかりでした。そんな中、LMC 助産師育成プログラムを知り、第 1 期生としてオンラインで学び、その後実践編に進みました。コロナ禍、他県で研修をするということは病棟から認められず、そんな中、静岡県くさの助産院の草野さんから声を掛けていただき、ついに病院を退職して実践編へ思い切り踏み出すことができました。

2021 年 8 月～12 月までの長期にわたり、くさの助産院で研修をさせてもらいました。私にとっては病院以外での助産師としての経験はすべて初めてで、妊婦健診（トラウベ、超音波）も、助産院でのお産（待機や呼び出し、ルートなし、モニター必要最低限、フリースタイル、臍帯切断は拍動停止後、産後アトニンなし、等）も、乳児健診（成長発達、親の心配事相談）も、驚きの貴重な経験でした。継続ケアとしては、初産婦さん、経産婦さんをひとりずつ受け持ちもさせてもらいました。なかなか進まないお産の最中に、病院ではあり得ないのですが、車に乗って近隣の公園まで坂を上りに行ったときの責任と喜びは忘れません。受け持たせていただいたお母さんとは今もつながっていて、私にとっても大事な家族のような存在です。また、会陰の創部ひとつとっても、今まで病院ではすべて医師まかせだったのが、その傷を縫うべきか、縫わなくても癒合するのか、自然抜糸した場合は再縫合すべきなのか、その女性の一生に関わるそのお傷に対し、助産師自身が責任をもって判断・対処しなくてはいけないのだと思い知りました。そして実際継続ケアを通し、その創部の変化を継続して見させてもらい、治癒の過程を知ることができ、そうしたひとつひとつが大きな学びとなりました。静岡に滞在しながら、多数の開業助産師を訪問、お話を聞かせてもらったり、実際に開業助産師同士のつながりを見たり、勤務助産師や医師とのよいつながりを見聞きすることができたのも貴重な経験でした。

2022 年 1 月～2 月は岐阜の赤塚さんのゆりかご助産院で研修をさせてもらいました。ゆりかごではいつも赤塚さんの屈託のない笑い声が響いていて、海外旅行やスポーツ観戦など赤塚さん自身が楽しく生きていて、スタッフの休み希望も基本的に必ず通る。助産師自身がハッピーでいることの大切さを感じました。朝のキッチンでは調理の合間に、いくつもの貴重なお話を聞かせてもらいました。産後も手を出し過ぎずに、お母さんたちに試行錯誤する余白をわざと残すこと、自分で助けを求められるかどうか見極めること、等々。また搬送事例や骨盤ケア、乳房ケア、分娩進行に関するアセスメントと介入等、実際に多くのことを教えていただきました。ゆりかごでは経産婦さんの受け持ちをさせてもらい、自由な産婦さんから、家族みんなで賑やかに過ごすお産など、今までにない学びをもらいました。

2022 年 4 月～8 月は山梨県の松浦照子さんのもとで、初めての自宅分娩を経験させてもらいました。受け持ち妊婦さんのご自宅にうかがい、天気のいい日はテラスで妊婦健診をしたり、お産後はみんなでお誕生の唄を作ってプレゼントしたり、太鼓を叩いたりギターを弾いたり踊ったり。照子さんとサポート助産師とで、昼間から自然の中にあるレストランで、おいしいお料理を食べながら振り返りや話し合いをするのも自宅分娩の醍醐味でした。繊細で自由で、とことん産婦さんと赤ちゃん優先の静かなおもしろいお産。私は研修であることを忘れて、とても楽しくそのお産に関わらせてもらいました。

それらの経験が私の血肉となって、今があると感じています。今は長野県の産院音々に所属し、また北杜市で自宅分娩のサポートをしています。育ててくれた実践編に、受け入れてくれた草野さん、赤塚さん、松浦さん、お母さんたちに感謝しています。

ママのねオンライン勉強会報告

西川直子

2020年からスタートしたママのねオンライン勉強会は、第5期に合計4回開催されました。LMC助産師として自律する助産師、かつ現場改革の経験がある先達の話を聞き、LMC制度実現に向けてひとりひとりが今何ができるか考え、行動していくための学びの場となりました。

◆第7回 【いつのまにか仲間になってた！ 女性も助産師もむすぶ 沖縄ふーちゃんの風とは？】
2021年7月31日(土)　　ゲスト:板垣文恵さん(沖縄助産院むすびや)

板垣さんから、助産院むすびやを開業して現在までの歩みを、お話ししていただきました。どのような経緯を経て、勉強会、自宅出産サポートチームが形成されているか、3人の助産師の声と2人の女性の声から、どのように「ふーちゃんの風」が広がっているのかをご紹介させていただきました。勉強会のメンバーが5人から31人に増えたこと、サポート助産師の仕組み、報酬など紹介していただきながら、板垣さんの想いに触れました。

・「助産師とは何をする人か？」というコアな部分が曖昧になると、助産師としての本来のケアが提供できなくなり、助産師としての自分を見失います。そこに対し勉強会を持ち、仲間と確認しながら進み始めた沖縄の助産師さん達の動きは見習いたいと思いました。

・助産師だけのお産(助産院でも自宅でも)には助産師同士の協力が不可欠。それはそうだけど、実際に仲間の輪を広げること、そのひとりひとりが助産師として輝いていることは、想像するよりはるかに大変なことだと思います。
その中で勉強会をしたり、報酬を工夫されたり、何よりふうちゃんのお人柄が人をつないでいるのだということがわかりました。
メインの助産師として、産婦さんだけでなく、助産師のケアをしていくこと、また自分自身も仲間にケアしてもらう(弱みを見せられる)ことが大切なのだと感じました。
開業を目指すかぎりは、わたしもそこまでできる助産師になりたいと思いました。

というご感想をいただきました。

◆第8回 【LMC助産師になるまでの道のりと“ちょっと”ご提案】
2021年8月21日(土)　　ゲスト:宮川友美さん(海(まある)助産院)

助産師になり、病院勤務・出産の経験を経て、海(まある)助産院を開業されて6年目の今、についてお話していただきました。助産院の建築の完成を待ちながら、継続ケアの楽しさや、地域での学びの場として自身も学ぶこと、後輩育成の場もつくりたいと話してくださいました。

・(開業するために)私はいずれ自分の中で「ここまで来たら大丈夫だろう。」というタイミングを待っていようと考えていましたが、早いに越したことはないというお言葉や、自分の取り上げた赤ちゃんが大人になり、その子がまた赤ちゃんを産むことを手助けできる醍醐味は若いうちに開業することでしか味わえない幸せなど、自分の視点にはない考え方を気づかせてもらいました。

・分娩に立ちあえなくても、女性とともに施設を移動して寄り添う、まさにLMCの活動のお話が伺えたことで、女性にとってLMC助産師が必要であることがよくわかりました。

などのご感想をいただきました。

宮川さんに、「LMC制度はどうやったら実現すると思いますか？」とお聞きしました。

「それは、簡単なことではない。けれども、お母さんたちが『必要や』、『私たちがそのLMC制度がないと安心して産めないよ』、という声をあげられたら、変わらざるを得ないと思う。

助産師と一緒に産んだらいいことあるよ、とお母さんたちに伝えていく必要もあるし、助産師がケアを提供できるようにならなければいけない。

助産師と出会ってくれたお母さんたちは力になりたいと本気で思ってくださっている。

助産師だけでは実現できない。お母さんたちと一緒に手を組むこと。地道な努力。数を集める。やれることをしていく。」

このような力強い言葉を話してくださいました。

◆第9回【新WHOガイドライン作成に携わった永井さんのお話を聴いて、お産の現場を見直そう】
2021年10月10日(日)
ゲスト:永井真理さん(国立国際医療研究センター 国際医療協力局 国際連携専門職・医師)

・女性にとって「ポジティブな出産体験」とは
どのようなものなのか
・新WHOガイドラインが「ポジティブな出産体験」
に注目した背景
・新WHOガイドラインを活用する方法の紹介が
あった後に、永井さんのお話
・WHO職員として各国でガイドラインの普及の
ために尽力されたご経験
・そのご経験を基に、ポジティブな出産体験のための分娩期ケアを日本で普及するための課題
・その課題を乗り越えるためのヒントについてお話しいただきました。

お話は多岐にわたり、次のような内容がありました。(詳細はHPの開催報告へ)
1. 途上国でガイドラインを導入するための病院での研修
2. 研修をする前に
3. 立ちはだかる制約
4. エビデンスにもとづくケア、その上で女性中心のケア
5. 混合病棟の課題
6. 保健師と一緒にすすむ
7. 嘱託医の課題
8. ジグソーパズル

・同じ妊娠期から分娩・産後を見ている助産師と医師だけでも色んなお互いの知らない部分があるのだと感じました。お互いをまずしっかり知り、課題を明確化して改善できるよう取り組んでくこと。

・エビデンスのあるケアの大切さを実感しました。

・意見が違う人との分かち合いの方法や、アプローチの仕方を学ぶ事ができました。

このようなご感想をいただきました。

◆第10回 【こども第一！いいとこどりで、無理せず、とにかく楽しい開業生活】
　2022年1月23日(日)　　ゲスト:鈴木知佳さん(愛知ふくろう助産院)

　愛知ふくろう助産院の鈴木知佳さんに、子どもを4人ご出産されながら、分娩介助ありの助産院を開業された経緯をお話していただきました。

　その後、お母さんの立場から中野裕子さん、開業助産師の立場から板垣文恵さん、松浦照子さんと対談という形で、鈴木知佳さんの歩みについて、さらに詳しく経済的なことも含めてご紹介がありました。

　どのようにして「こども第一！いいとこどりで、無理せず、とにかく楽しい開業生活」が実現できるのか、どうやって子育てをしているのか、家族の協力を得ているのか、事前に多く質問をいただきました。「経験が足りないのではないか」とまわりの圧を感じることがありながらも、出産ケア政策会議に第1期から関わり、想いを共にする仲間の助産師の励ましを得て、一歩ずつ開業の道を歩まれているお話に、多くの感想をいただきました。

・「自分の大切にしたいことを犠牲にしなくて良い」という言葉に大変勇気づけられました。

・子育てを優先しながらも、自分のしたい働き方を選択していくことも可能であり、むしろその方がイキイキと自分らしくいられることに驚きました！

・自身の生き方や生活が満たされていないと、助産師としてのエネルギーがわいてこない。我慢しなくていい。やりたいことを実現している幸せな助産師、そういう人にケアされている女性は幸せなお産ができると、いろんなメッセージから感じさせていただきました。

・起こっている目の前の今にどう向き合うか。子育て・お産は今起こっているという言葉がとっても印象的で、本当にそうだな！っとスッキリ気持ちがいい感じを味合わせていただいています。

「今、大切にしたいことを大切にする。」という最後にメッセージを投げかけてくださいました鈴木知佳さんに、心から御礼申し上げます。

最後に、第7～10回をとおして参加してくださいました方の概要です。

表１．都道府県別第7～10回ママのねオンライン勉強会の参加者人数

	第7回	第8回	第9回	第10回	合計		第7回	第8回	第9回	第10回	合計
沖縄県	17	10	8	14	49	山梨県	1	1	1	2	5
岐阜県	10	13	7	9	39	三重県	0	2	1	2	5
神奈川	9	5	8	14	36	愛媛県	2	2	0	1	5
大阪府	7	13	6	7	33	茨城県	0	3	1	0	4
京都府	5	15	5	2	27	岡山県	2	2	0	0	4
愛知県	3	6	9	4	22	鹿児島	0	4	0	0	4
北海道	5	4	7	4	20	宮城県	2	1	0	0	3
静岡県	5	7	6	2	20	群馬県	1	1	1	0	3
兵庫県	5	5	5	4	19	富山県	1	1	0	1	3
滋賀県	6	5	3	4	18	福岡県	1	0	0	2	3
千葉県	4	4	3	6	17	長崎県	1	1	1	0	3
埼玉県	4	2	4	6	16	宮崎県	1	0	1	1	3
東京都	2	3	8	3	16	鳥取県	0	0	0	2	2
奈良県	2	1	10	0	13	広島県	1	1	0	0	2
長野県	1	3	2	4	10	山口県	1	1	0	0	2
熊本県	2	3	2	2	9	徳島県	0	0	0	2	2
秋田県	3	1	2	2	8	佐賀県	0	1	1	0	2
岩手県	1	1	1	4	7	大分県	1	1	0	0	2
和歌山	1	3	2	1	7	海外	2	0	0	0	2
高知県	2	2	1	2	7	島根県	0	0	0	1	1
新潟県	1	1	1	3	6	香川県	0	0	1	0	1

※青森県、山形県、福島県、栃木県、石川県、福井県は0であった。

表2．参加者（助産師）の職業形態

	第7回	第8回	第9回	第10回
助産師ではない	23	22	16	6
地域開業（分娩扱いあり）	19	14	17	12
地域開業（分娩扱いなし）	17	20	18	19
病院勤務（産科単科）	13	15	8	13
病院勤務（産科混合病棟）	10	17	9	8
病院勤務（産科以外）	0	3	1	1
診療所勤務	8	8	9	11
教育機関勤務	3	5	14	4
行政関係勤務（市町村、保健センターなど）	5	7	3	5
上記以外の形で勤務	6	8	7	20
休職中	8	10	7	12

表3．参加者の分布

	第7回	第8回	第9回	第10回
正会員	46	70	54	57
非正会員の学生以外	62	48	51	51
非正会員の学生	4	11	4	3
合計	112	129	109	111

表1より、沖縄・岐阜・神奈川・大阪・京都・愛知・北海道・静岡・兵庫・千葉・埼玉・東京は出産ケア政策会議のイベントに関心の高い方が多く、青森・山形・福島・栃木・石川・福井は参加者が0であったことから、地域によって情報伝達や関心の差が大きいと考えました。

表2より、参加者は助産師以外の人数が最も多かったこと、また、開業助産師の参加者が多いことが分かりました。LMC制度の実現に対して、助産師以外の女性の立場の方や、開業助産師などの期待が大きいといえるでしょう。第9回の新WHOガイドライン作成に携わった永井さんのお話の会は教員の方の参加が多く、新WHOガイドラインに対して教育に携わる立場の方の関心は高いと考えます。

表3より、正会員だけでなく非正会員の立場の方の参加も多いですが、学生の方の参加者が今後増えるようにしていきたいです。教育に携わる立場の方からイベント紹介をしていただくことも工夫をしていきます。

出産ケア政策会議では、ママのねオンライン勉強会の告知をHP、メーリングリスト（登録者約1100名）、インスタグラム（フォロワー約1300名）、フェイスブックページ（フォロワー約1600名）などで実施しています。この人数から分かることは、出産ケア政策会議が目指す「LMC制度の実現」に関心を持っている方は非常に多いということです。世界保健機関（WHO）のガイドラインの中で推奨されている「助産師主導の継続ケアモデル」。幸せなお産、そして幸せな育児につながる助産師主導の継続ケアシステムの実現のためには、最後にはひとりひとりの人の力が最も重要だと思います。

これからも、ひとりでも多くの方と繋がり、力を発揮してシステムを実現するために、ママのねオンライン勉強会を続けていきます。ぜひ周りの方もお誘いの上、これからもご参加・ご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。助産師を目指す学生の方、教育に携われる方にもぜひお声かけください。

ロビーチームの活動報告

中井美容

ロビーチームでは、チーム全体で継続ケアに関する調査や広報を行う他、メンバー個々人が各地方自治体において行政や議員、関係団体に働きかける活動を行っています。

◎ロビーチーム全体の活動

2022 年 3 月 31 日～4 月 13 日に前回に引き続き「産後 1 年未満の初産婦」の方のご意見をうかがうことにより、そのお声を出産ケア政策に反映させることを目的として「子育てアンケート調査」を実施しました。調査結果は 2022 年の活動報告書にまとめる予定です。今期に報告できなかったことは残念ですが、どうぞご期待ください。

ロビーチームではアンケート調査が有意義なものになることを目指し、アンケート項目の表現方法などもメンバーで検討していきました。それらを検討していくなかで、メンバーひとりひとりの出産を振り返ることもありました。また、日ごろの自身の提供している助産ケアを振り返り、お互いに共有することで、今後の活動への思いを強める機会にもなっていました。今回で2回目の調査になりますが、調査のノウハウ・調査結果というデータだけではない成果が調査を重ねるごとにロビーチームのメンバー内に蓄積されていくのを実感しています。

◎チームメンバーごとの活動

国会議員に対して、前年度の「子育てアンケート調査」の結果を用いてプレゼンテーションを行いました。また、日ごろから少子化、LMC 制度に興味を持ってもらえそうな地方議員をリサーチし、情報交換などつながりが持てるよう活動しました。それにはメンバーの人脈などネットワークを駆使し、どのようなアプローチの方法があるかなどミーティングやメールなどで情報共有、および相談、検討などメンバー同士で様々な支援・協力をしながら活動しました。そして、新聞記者を育成プログラムの中の「女性のお産の体験談を聴く会」にご招待するなど、メディアへの働きかけも行いました。

また、毎月開催のミーティングでは、メンバーが実際に行っている事業（兵庫県丹波篠山市の My 助産師ステーション事業）を情報共有しました。そのなかには、メンバーが他団体でおこなっている同じような目的の事業の情報共有もあります。そのような様々な情報共有をすることで活動の幅が広がっていると感じています。

ロビーチーム活動報告
自民党青年局にて LMC 制度の重要性を伝える

ドーリング景子

出産ケア政策会議では LMC 制度実現にむけ国会議員へのロビイングを行なっています。

現在日本では、2022 年に「こども基本法」が成立、2023 年には「こども家庭庁」創設予定等、こども政策が推し進められています。それに先駆け、自民党では若手議員を中心に「Children First の子ども行政のあり方勉強会」が行われ、2021 年 2 月の第 2 回勉強会では、当団体よりニュージーランドの LMC 制度について紹介しました。それに続き、2021 年 5 月には「子どもを産み育てやすい社会」を目指して行われている自民党青年局の勉強会でも、LMC 制度の概要とその重要性についてお話をさせていただく機会をいただきました。

育児不安や虐待等、こどもを取り巻く問題に対し、周産期ケアにできること、助産師にできること、それは、こどもを育む女性に、妊娠期から伴走し、陣痛や出産へ寄り添い、産後を支援することです。同じケア提供者が継続して関わっていくことで、助産師と女性の間に安心や信頼、体験や責任の共有が得られ、女性を中心としたケアが維持されます。

さらに、女性が尊重され尊厳を大切にされることで、女性が母親としてこどもを尊重し大切に育むという連鎖が起こります。WHO のガイドラインでも、母子が出産で亡くならないだけではなく、母子がその後の人生を力強く生き、成長していくために、女性のポジティブな出産体験の重要性が示されています。

そのような出産体験を導く LMC 制度は、こどもにとっても大切な「はじめの一歩」であり、こども政策に欠かせないものです。自見はなこ青年局長代理からも「今回学べたことは、妊娠・出産へのケアや周囲の理解がその後 10 年、20 年の子育てに大きく影響するということ。そうした観点から、助産師、産婦人科医の方にももっと力を発揮してもらえるよう取り組んでいきたい」と意見をいただきました。

新たな制度を作ることは容易ではありませんが、勉強会にはオンラインを含め全国の自民党議員が参加しており、こども政策における妊産婦ケアの重要性に対し、多くの共感を得ることができたと感じています。その共感がさらに制度への賛同と実現にむかうよう引き続き国や自治体への働きかけが必要です。

自民党青年局 HP より

WEB チーム活動報告
WEB ページ完成と今後の広報活動について

やまがたてるえ

2021年の活動の中で、大きく力を入れていました、WEB が無事に完成しました。
この WEB ページは出産ケア政策会議について、一人でも多くの方に知っていただきたいとの思いから、構成、デザインを考えていきました。項目は LMC とは、LMC 助産師を探す、LMC 助産師を目指す、LMC 制度化にむけて、私たちについて（団体概要）、お知らせ一覧となっており、現在、会員になってくださっている LMC 助産師の紹介ページで照会をさせていただいております。

以前の WEB ページとの大きな違いは、イベントのお知らせや報告がこちらのページで一元的にみられることです。LMC 助産師養成プログラムや、そのほかの勉強会や活動についても、SNS などを観なくともこちらのページから確認できることは大きなメリットになっていると考えます。

一人でも多くの方に、出産ケア政策会議の柱となる LMC 制度実現のための情報が届くように、とくに助産師たちに届くように、イベント、勉強会を中心としながら、勉強会やイベントの紹介を Instagram を中心として、発信しています。

また、広報活動のメンバーも新規会員さんの SNS に詳しい方や、やってみたいと主体的に動いてくださる方もでてきて、これからどんどんと、まだ助産師と一緒に出産をしたい女性たちやそのご家族など届けられていない人たちに届いていくのではと予想をしております。

また会員だけでなく、この活動報告を読んでくださった皆様もぜひ応援の意味をこめて、各種 SNS のフォローやシェアで応援をしていただけると大変広報チームとしてもありがたいと思っています。

今後も、LMC 制度について、LMC 助産師の活動、ロビー活動なども広報活動し、すこしでも多くの方たちと手を取り合って、妊娠初期から出産・産後の継続ケアがすべての女性のもとに届くように発信をしていく方向で広報チームも動いていきます。

LMC 制度実現プラン事業展開（団体）
長野「産院音々」始動から３年半後の現在

出張さんばステーション朝霞：たかせ助産院　髙瀬洋子

1. 産院音々の体制

2019年12月～御代田中央記念病院記念病院付属「産院音々」として分娩を開始し、4年目となった。

2. スタッフについて

現在：開業助産師（分娩取り扱い）4名（長野、山梨、群馬、埼玉）
開業助産師（保健指導）2名（群馬、山梨）
フリー助産師　9名（長野5名、山梨4名、）
医師　1名

- 助産師の15名の内訳
  外来専属2名、音々助産師13名

- 助産師の経験年数
  10年以上　10名　　5～10年　2名
  5年以下　　3名

3. 分娩の実際

2021年6月～2022年8月　分娩件数　24名（うち吸引分娩1名、促進分娩3名）
母体搬送3名（前期破水2名、産後高血圧1名、新生児搬送0名）

4. 全体の会議等

月3回のZOOM会議　毎週木曜日　1～2時間程度
・第2木曜日　事務連絡などミーティング
・第3木曜日　産婆学ぶDAY「女性と助産師のパートナーシップ　実践のためのモデル」の読み合わせをし、意見交換、その他
・第4木曜日　妊産婦さんの情報共有

5. チームミーティング

① 受け持ち妊婦さんの健診、医師も一緒にチームでの情報共有（メールや電話、ZOOMなど）
② 37週前にはチームでフリースタイルでの体勢確認、物品確認、緊急時対応シミュレーション
③ チームとその後全体でお産の振り返り（2～3時間になることも）
④ 妊産婦さんとの交流会　・産後の会（うち一回はコロナによりZOOM）
・安産ストレッチ
・お散歩の会
・フラを踊ったり、竹刀を振って軸を感じる体幹づくり
・ブルーベリー狩り

6. 継続ケアを受けた女性の声（45名中43名がとても満足95%、2名が満足5%アンケートより）

- 助産師と妊婦ではなく、お散歩会や日々の健診を通して女性と女性としてお話しができた。
- 3人の担当制はとても良いと思う。担当外の助産師の方にも色々気にかけてもらい、心強かった。担当制でしっかりと自分のことを把握してもらえて安心。
- 絶大な安心感でした。
- いつも皆さんが私と会話してくださっている充足感がありました。またチームとして様々な方との会話、接し方が学びにもなりました。3人目の出産でしたが、体が楽になるのが早いのと、疲れを良く感じることが出来ました。
- 本当に親切にしていただいき、継続ケアのおかげでお産の時のリラックス度が圧倒的に違いました。
- いつでもラインで相談できたり気にかけてくださったり、本当に安心できた。出産は終わりではなく、その後もずっと支えて下さる安心感がある。
- 何を言っても信頼してくれるとか、どんな自分でも大丈夫と思えることが安産につながったと思う。終わってから痛かったり辛いことを吐き出せる場所があると思えるだけで、安心して子育てができるから、ここへ来れば大丈夫というお守り的な場所になった。

- 私は今回、様々な助産師さんと接する機会が多かったですが、その時々の状況によっていつも同じ助産師さんであるとは限らないと思います。それでも音々にいる助産師さん達は、どの方も親切ですぐに向き合ってくれる雰囲気で心地よかったです。妊婦健診では同じ助産師さんといつもお話しができたので、安心できたり、スムーズに進んだりしてとてもいいと思いました。
- いざとなったら、すぐに連絡が取れたので良かった。
- 心身のことから心のケア、息子のこと、家族のこと、トータルで大事に見ていただき、とても安心して出産にのぞめました。産後も心穏やかに過ごせるのは、話しを聞いてもらったり、大切にして頂いたお陰です。気持ちが落ち着いているので、体の回復も早いのだと思いました。
- 赤ちゃんと二人きりという不安がなくてよかった。夜とかもちょこちょこ来てくれたりして、心強かったです。楽しいこともしていただいたり、お話もしたり、寂しくなくてよかったです。
- 里帰り出産だったので、30週からお世話になりましたが、同じ助産師さんが関わってくださることで、とても安心してお産にのぞめました。体のことも良く分かっているので（私のこと？）安心でした。
- 健診のたびに、少しずつコミュニケーションが取れて、自分や家族のことを知ってくれた助産師さんがずっと関わってくれたことは精神的に安定できたし、何より最後の2回、家族で音々に来られたことで、お産当日、子どもたちや旦那さんも不安が和らいで過ごせ、家族みんなに囲まれた良いお産となりました。家族共々感謝です。
- 回を重ねるごとに打ちとけて、言いにくいことも言えるようになるので、お産の時にはチームワークが発揮される気がする。
- 人見知りなので、同じ助産師さんで心強かったです。
- 今までの経過を知ってくれているので安心して自分の気持ちを話すことができたり、相談しやすかった。

7. スタッフの声

- 受け止めてもらえるという関係性がある。
- 困った時、チーム以外のメンバーに相談することが出来る。
- 共に共有できる仲間がいることに感謝している。
- 上下関係ではなく、仲間として繋がっている実感がある。
- みんなで泊まりに行けば、一列になって背中を洗い合う笑い合う仲間がいる。
- 病棟では教わることのできなかった助産ケア・技術・知識、そして産婦さんのことを第一に考えた向き合い方を、日々濃く教えてもらっている。
- その妊婦さんに合わせた、楽しく必要なことが出来る。（産婦さんとフラを踊ったり、ジャンベで踊ったり、ウクレレで歌ったり、剣道したり、結婚式をしたり）
- いつも美味しいご飯をぱっと作って、みんなで食べられる。
- 褥婦さんに出す食事を、病棟の盛ったプラスチックの皿ではなく、ガラスや陶器の器に移し緑を添えたりと、形だけでなく、業務だけでなく、本当にお母さんたちを大事にしている。

- お産の振り返りが濃い。お産に入ってない自分も、まるで参加していたかのように学びを得ることが出来る。自分だけでは気づけないことに気づける。
- 継続ケアを実践できている。毎回、妊婦健診で産婦さんに触れ、少しずつリラックスしたり、音々の助産師に慣れていき、その女性を知りお互いの関係が深まっていく。涙を流してお話しされる方もいるし、それをきっかけに開放されて、進んでいける人もいる。
- チームメンバーが変わると、個性の違いに戸惑ったり、驚いたりしながら、自分自身の成長につながる。

8. 今後の課題

- 遠方の助産師が多いため為、近隣に住む助産師が少なく、メンバー構成が難しい。
- 医師がいることで、本来、助産所で受けられない合併症のある妊産婦さんを受けることもあるため、医師との意見を細かくすり合わせていく必要がある。
- 助産師の報酬の再考。
- 研修生の受け入れ体制づくり。

9. 将来の展望

- 分娩開業助産師を目指すための場➡LMC助産師の育成
- 助産業務ガイドラインに縛られないで妊産婦さんのケアができる助産師の育成
- 全国のモデルケースとして、色々な場に継続ケアができることを目指したい
- 音々で学んだあと、自立した開業助産師として活躍してほしい
- 将来的に開業助産師がオープンシステムとして利用する場となり、完全独立を目指す

LMC 制度実現プラン事業展開（個人）
暁～あかつき～助産院　　やめられないＬＭＣ♡　実践報告

中村暁子

＊はじめに

2019年に初めての継続ケアを実践し、目からうろこの体験をしました（3期活動報告書参照）。2021年に以前から開業していた暁助産院を分娩も取り扱う助産院（出張専門）とし、勤務助産師として働くだけでなく、LMC助産師として継続ケアを希望される女性やご家族に寄り添っていくことを決意しました。

産前から妊婦さんとの関係性を築き、出産に向けて対等なパートナーとしてともに歩み、出産を迎える。この LMC 助産師としての働き方は、勤務助産師として日々多くの妊産褥婦さんに関わっていても知ることができなかった学びや、この上ない喜びが得られ、仕事へ向かう大きなエネルギーをもらえます。

この体験は、長年勤務助産師としてその働き方に疑問を感じることもなく、お母さんたちと関わることが楽しく、やりがいを感じて働いていた私の助産師人生を大きく変えました。そんなLMC助産師の魅力を多くの人に知ってもらいたいと思い、私のLMC助産師の実践を紹介させていただきます。

2021 年度は、4名それぞれ個性豊かな方々の命の営みに寄り添い多くの学びと喜びを得ました。

＊実践 ①

クリニックのオープンシステム　経産婦 K さん

第1子の分娩所要時間は38時間。吸引クリステル、鉗子分娩での出産。クリニックで働く助産師全員が勤務ごとに関わりやっと、やっと赤ちゃんは生まれてきてくれました。Kさんとはその時からのご縁でLMC助産師の依頼を受けました。K さんの希望は「スルッと産みたい」でした。

K さんの前回の妊娠時の体重増加は 16kgでしたが今回は 7 ㎏増でした。そのことを K さんは、私が毎回の健診時に体重や血圧の変化、運動量などを聞いて状況を共有するので、それを目には見えないプレッシャーと表現し、「自分の気持ちをいい状態でキープし続けることができた」と言われました。そのように自分の気持ちを維持しながら妊娠期を過ごして臨んだお産は、本人もびっくりのスピード出産でした。その時の気持ちを「前回は、何度も何度も病院の時計の鐘の音を聞いても生まれる兆しが見えなかった長時間の出産を経験した私にとって、自分の予想よりもはるかに早かった中村さんのお産の予想が心の支えになった」「出産は痛くて辛かったが中村さんの見守りのもと、赤ちゃんと私のペースで生まれてくれたことに幸せを感じた」「第1子の時は皆さんの力を借りて、やっと生まれてくれて幸せでしたが、同じように生まれてくるのにこんなに違うのですね」と話してくれました。

＊実践 ②

ゆりかご助産院のオープンシステム 経産婦 H さん

私に初めてのLMC助産師を経験させてくれた方で、第3子も LMC の依頼を受けました。「今回は医師はいらない」「助産院で産みたいので中村さんにいて欲しい」と言われ助産院での出産になりました。

２人目のお産の時は「いい人でいたかった」。クリニックのスタッフの言葉や表情で、「まだ生まれないと思われていると感じた」早く生まれると思っていたのに時間がかかり、「中村さんを待たせている、早く産まなきゃ！」と、どんどん気持ちが焦るほどお産が進まないという体験をし、3 人目のお産は「自分の好きなようにやろう」「こだわりを手放す」と言われ、妊娠中から自分の思うように、自分の心と体に向き合ってきました。

でも、出産が近づいてくると、「お産がこわい」「痛いのはいやだ」「妊娠中からあんなに頑張ったのにうまくいかなかった」「最後に、どうにでもなれ！と思って手放せたのに、日常生活では手放せていない」など、前回のお産を振り返り、たくさんの不安を話され、それでも前向きな思考にはなれず、今は励ます言葉は必要ないと思い、私は「こわいままでいいよ」「H さんがして欲しいことを教えて」「伝えてもらわないとわからないから伝えてくれるとありがたい」と話しました。

H さんの出産はそんな気持ちのままでやってきましたが、私の言った「伝えてもらわないとわからない」「伝えてくれるとありがたい」の言葉だけが H さんの心に残っていたそうです。

そして、陣痛の時の H さんは、「ここを押さえて！」「こっちも」「そこじゃない」と、言いたいことを好きなように言って、私と赤塚さんの4つの手をフルに使い、自分の好きなように産みました。

H さんは、その時のことを「初めて人に甘えられたお産だった。」「良い子でないと受け入れてもらえないという思いをお産の時に少し捨てられた。」と話してくれました。

＊実践 ③

クリニックのオープンシステム 経産婦 I さん（トーラック希望）

第1子は逆子で経腟分娩が叶わず、予定帝王切開の前に陣発したため緊急帝王切開で出産された方で、ゆりかご助産院で初めてお会いした時はつわりのためか、表情が冴えずコミュニケーションをとるのが難しい印象を受けました。

トーラックをするには LMC 助産師が必要なのだと思い、私にLMC助産師を依頼されました。I さんの希望は、「トーラックをすること」「つわりが大変なので、仕事は休める限り休みたいが、薬や点滴はいらない」「妊婦健診はトーラックができる医師に診てもらいたい」「トーラック経験者の体験談が聞きたい」でした。

妊婦健診ではそれを叶えるように関わりましたが、健診を重ねてもお互いを分かり合える関係性を築くことが難しいと感じる方でした。妊婦健診では、つわり対策を伝えたり、仕事の調整のために診断書を医師に依頼したり、赤ちゃん返りの上の子との関わり方や、困っていることへのアドバイスなどを行いましたが、I さんと私が他愛のない会話をすることはほぼありませんでした。I さん自身がその必要性を感じていないのではないか？とも感じたので、それを尊重することにしました。

しかし、関係性を深められないと感じる関わり方でよいのか？と常に悩みながらの LMC 助産師でした。I さんに私に求めることはありませんか？と聞きましたが、このままでよいとの答えだったので、私の役割は、I さんのトーラックの目的達成のために必要な助産師という位置づけだったのではないかなと思っています。

I さんの出産は、夜に陣通がきて、その後順調に進み朝には赤ちゃんが生まれました。

出産の経過は順調だったので、私としては特に何かを促すこともせず、I さんのあるがままに寄り添っていました。そんな出産の最中に I さんは、「本当に経腟で産むことができるのかな？」と不安に思っていたようで、医師が様子を見に病室に来たときに何も言わず何もせずに帰っていったことから、「あぁー、何もしてくれないんだ。」「自分で産むしかないんだ」と、「その時に覚悟が決まった。」と話してくれました。

強い意志でトーラックを希望し、陣痛中も弱音を吐くこともなかったので、不安に思っていることを私は気付かずにいました。妊娠中から I さんが気持ちを表出できるような関係性が築けていれば、出産の最中に不安の表出ができたかもしれないとも思いましたが、それでも私にはお互い同じ目的をもって進んできた過程があり、目標に向かっている連帯感のような感覚はありました。

Iさんが出産後にトーラックを受けてくれた医師に書いてくれた手紙の一部を紹介します。

「自分は病気でもないのに、むしろ子宮口も順調に開いてきているのに、赤ちゃんの安全のためだけに、命をかけて切りたくないお腹を切る恐怖と無念」「苦しんだけれど、産んだという実感はなくて、私の意志に関係なく取り出されたこの寂しさ、喪失感」「帝王切開が受け入れられず、やっぱり下から産んでみたい！」「納得のいくお産がしたい！」「もし、チャンスがあるなら、トライしてみることに意味があると思う」

こういう切なる思いがあることを医師や助産師は知らなければいけないと思います。

＊実践 ④

自宅出産　経産婦 G さん

7年ぶり3人目の出産。コロナで家族の立ち合いができないことで自宅出産を選択した方です。7年ぶりの出産ですが、出産への不安はなく、家族みんなで出産を迎えたいと、自宅出産が初めての私に依頼をいただきました。

明るくて前向きな性格の G さん。何回か自宅での妊婦健診にも伺い、どこで産む？どんな風に産む？などのイメージを色々と話したり、疑似体験をしたりしました。請け負う私は、自宅出産をされている先輩助産師さんに教えを請い、赤塚さんにもサポートしていただき色々な準備を整えました。

そんな中、出産10日前に G さんが発熱し、まさかコロナ感染かも？という事態になり、おなかの張りも増えこのまま出産になったら、いつどのようになれば嘱託医に相談するのか？など、とても悩み助産師仲間や、先輩助産師さんなど、さまざまな方の助言をいただきました。でも、最後に決断するのは自分なのだと、改めて助産師としての覚悟が問われる体験でした。

出産の時は、自宅出産初心者の私に赤ちゃんが気を使ってくれたのか、その日は自宅出産をされている助産師と一緒に健診に伺う日でした。私の仕事の都合で夕方の約束の時間にかなり遅れて2人で妊婦健診に伺うと、その時間に合わせたように陣痛が始まっていました。そして、上

の子どもたちが眠くなる前に赤ちゃんは生まれてきました。自宅で産む。それは、そこで暮らす人がおのずと主役で、私たちはただただそこにいさせてもらっている。誰に許可を取ることもなくGさんが好きなように動き、好きな体勢をとり、私たちはそれに合わせるだけ。子どもたちは Gさんのところに来たり離れたり、ゲームをしたり、日常の中に出産がある。誰のものでもない女性と家族の出産。素敵だなぁと思いました。

＊最後に

2021 年度は、LMC 助産師として、異なる場所で出産をサポートする体験を通して、産む場所での助産師の立ち位置や、助産師の在り方が産婦さんにも伝わり、出産の進行やその後のメンタルにも影響を与えるということを学びました。産む場所が産婦さんにとっても助産師にとっても安心、安全な場所であることがとても重要だと感じました。そのために産婦さん自身が安心と思える場所を選べればよいですが、オープンシステムは限られた場所でしかできませんし、嘱託医の問題もあります。すべての人が助産院や自宅で産むことを安心と思えない中で、それぞれの人が安心できる場所を自由に選択できる環境が整えばいいなと思いましたが、そもそも、産み方がその後の生き方や子育てに大きく関わるということすら気付いていない女性がほとんどのこの状況を何とかしたいとも思いました。

出産ケア政策会議では、団体全体としての活動の他、各々のメンバーがそれぞれのバックグラウンドや人脈、特技などを活かしながら、LMC制度の実現や継続ケアの普及のために様々な活動をしています。その様子をご紹介します。

論文・書籍等、会員執筆情報

第5期（2021年4月～2022年5月）の間に会員が執筆した書籍等を以下にご紹介します。

■ドーリング景子
『女性と助産師のパートナーシップ　実践のためのモデル』翻訳出版
著：カレン・ギリランド氏、サリー・ペアマン氏
日本助産師会出版　　2022年2月発行

■成瀬郁
助産雑誌　Vol.75 No.3・No.4　（2021年4月号・5月号）
「丹波篠山市でMy助産師による産前産後の継続ケアを始めました」

■古宇田千恵・中野裕子
助産雑誌　Vol.75 No. 11（2021年11月号）
「助産師主導の継続ケアがポジティブな出産体験に
　つながる理由を考える―母親と助産師の語りから［前編］

助産雑誌　Vol.75 No. 12（2021年12月号）
「助産師主導の継続ケアがポジティブな出産体験に
　つながる理由を考える―母親と助産師の語りから［後編］

■西川直子
助産雑誌　Vol.76 No.1　（2022年2月号）
特別記事
当事者の声にみる「COVID-19流行下の妊娠・出産」と求められるケア
――オンラインアンケートで寄せられた女性・助産師・医療者の経験をもとに考える
リプロ・リサーチ実行委員会（西川直子、他）

「語り継ぐ私のお産と生き方」イベント開催報告

西川直子

「語り継ぐ私のお産と生き方」のオンラインイベントを、2021 年 5 月に開催しました。第 1 期LMC（My）助産師育成プログラムの中で、11 人の女性のお産の体験談をお聴きしたことがきっかけでした。イギリスに住み、日本の助産師資格を持っている人間としてその時に最も感じていたことは「働いていたときに女性がこんな風に感じていることを自分は全く分かっていなかった。女性の話を日本の助産師はもっと聴かなければならない」という強い危機感でした。その危機感は今も強く持っています。コロナ禍で多くの妊産婦さんはさらに声を聴いてもらえなくなりました。傷つき、その傷が癒えないままでいます。助産師の継続ケアシステム、助産教育の必要性を今こそ感じています。

●開催日：2021 年 5 月 5 日、16 日、30 日（9：00, 11：20, 13：40, 16：00, 21：00）
●話し手、聞き手として参加してくださった皆様：熊谷通代さん、左古かず子さん、大野誠士さん、河合夏実さん、板垣文恵さん、梅崎七海さん、富岡美智子さん、松浦照子さん、 廣瀬真実さん、鎌田洋花さん、Ms.Anabel、Ms.Paca、寺本裕美子さん、ドーリング景子さん、宮内はるみさん、フリッツ郁美さん、新庄祐子さん、細田恭子さん、池田れなさん、齋藤麻紀子さん、徳廣直子さん、Ms.Katharine、小澤淳子さん、ウィルソン寛子さん、冨田和奏さん、SUNNY さん、きくちさかえさん、今村優子さん、河合蘭さん、中尾慶子さん、 福本幸子さん、四角大輔さん、村上絢子さん、小出久美さん、福平裕子さん（日本、スペイン、イギリス、ニュージーランド、オランダを繋ぎ、イギリスから主催）
●詳細：https://peraichi.com/landing_pages/view/katari05052021/

このイベントを開こうと決めたのは第 1 期 LMC 助産師育成プログラムの終わった 2021 年 3月のことでした。毎週火曜日の昼と夜にミーティングを開催しました。「場づくりが大事」と大野誠二さんには最初からたくさん助けていただきました。全ての体験談の前に「安全な場づくりのための9つの原則」を共有させていただけたことは非常に重要でした。ひたすらに熱い思いで猪突猛進な私に「オンラインで、しかもどんな立場の方が聞いているのか分かりえない場の中で、自分のお産を語るということの怖さ、不安、語り手の女性の気持ちを、私は全く分かっていなかった」ということを熊谷通代さんに気付かせていただいたことは、今でも心から深く感謝をしています。

毎週のミーティングの中で「語り継ぐ私のお産と生き方」というタイトルに決めたこと、録画配信はしないと決めたこと、はじめから話を聴いていただくために「開始 5 分を過ぎてからのZoomへの参加はお断りする」と決めたこと、ミーティングに参加してくださった方々とのその過程こそが、今も大切な宝物です。お産を語る、聴くということはひとりひとりの非常に繊細な記憶、想いに触れる可能性があるということ、そのために安心・安全な場が必要で、まずは企画側、話し手聴き手が繋がりを感じ、安心・安全を感じていることが重要でした。

今回の 3 日間のイベントに、合計 290 人の方がお申込をしてくださいました。話し手や聴き手として、32 人の方が関わってくださいました。参加費の合計 738,678 円を出産ケア政策会議に送ることができました。関わってくださった皆様、参加者の皆様に、心からの御礼を申し上げます。ご感想はこちらにまとめています。
https://note.com/nishikawanaoko/n/n6f6697a469e8

ニュージーランドのように、妊娠したら助産師と出会い、同じ助産師と、妊娠中も、出産も、産後も関係を築き、安心した環境の中で、女性が自分で選んだ方法でお産をする。そのようなシステム、LMC 制度を日本に作るために、私は事務局として、これからも尽力していきます。

人口 1900 人の村民になって活動した一年

でいだらぼっち北海道　高橋宏美

●夫婦で出産ケア政策会議2期から所属
●京都→札幌→留寿都村在住（人口約1900人）
4人家族（左の絵：夫作）
第1子京都：助産院→総合病院緊急帝王切開
第2子北海道：総合病院VBAC出産

【活動グループ】（下記写真参照）
◆『でいだらぼっち北海道』発足（2019 年）
メンバー：助産師4名、父母3名
「お産を語る会」を道内各地で毎月開催中。～いのちの始まりの「お産」を大切にできたら、すべてのいのちを大切にできるあたたかな社会になると信じて～この言葉を京都のチームから受け取り、北海道でも助産師さんの存在をもっと身近に感じてもらったり、「お産」についての語り合いを大切に活動しているチーム。

◆『北海道に My 助産師（LMC）制度を。』発足（2020 年）
メンバー：助産師6名、父母4名、学生1名
LMC 制度に賛同し、北海道で一緒に動いてくれる仲間を SNS で募集。制度化に向け北海道でできることを共に考えるチーム。

【2021 年5月～2022 年4月 1 年間の活動報告】（下記写真参照）
2021 年4月に留寿都村に移住（親類、友人も無し）人脈を一から作っていく期でした。

【活動①】お産を語る会：交流古民家、助産院、ゲストハウス、cafe、公民館等で開催。
◎参加者さんからのコメント◎
🤰 妊娠前からこの会に出会えたお陰で妊娠、出産の概念をガラリと変える経験ができた。
🤰 安産だった私には関係ない会だと思ってた。でもここにはどんな自分にでも寄り添ってくれる助産師さんたちがいた。不安を隠していた過去の自分に教えてあげたいな。
🤰 子どもを産みたいか育てたいかという前に、このように色々な方のお話をお聞きできるのはとてもいいですね。助産師さんにも親近感が湧きました。
【活動②】市立大学助産学生さん取材協力：お産、子育てインタビューを受ける
【活動③】無料オンライン勉強会：産後うつ産後クライシスからの LMC 制度への必要性、旭川助産院休止問題、沖縄とのお産交流会、LMC 制度勉強会、チームメンバー交流会開催
【活動④】他団体との繋がり：近隣市町村子育て支援団体や北広島マザーリングサポート協会（妊娠・出産・育児期の家族が地域格差なく質の高いケアが受けられる事、お子様たちの健やかな育ちを守るために創設した北海道の子育て支援多職種団体）勉強会参加
【活動⑤】お産マップアンケート実施：SNS を使用し、北海道で 2020 年以降に出産された方へアンケート実施中（現在の回答112名）その回答を利用し北海道全体のお産施設の場所や特色等わかりやすいお産マップを目指し作成、その後各地に掲載予定
【活動⑥】留寿都村地域おこし協力隊の方と世代を越えた地域コミュニティー古民家作り

でいだらぼっち
お産を語る会
メンバー

<u>北海道179市町村で出産できる施設は現在77件のみ</u>
（うち、札幌に33件と都市部に集中、旭川に3件あった助産院も2021年8月～休止）
地方では病院が1～3時間かかる場合もざら。選択すらできない状況。無介助分娩増。

💗出産可能施設
雪の時期お産場所に
行くのも命がけ

子どもは
ソリ移動
が基本

納得のいくお産に
繋がるようMAPを
作成していきます

【今後の活動目標】
・北海道の地域ごとに志が同じメンバーを増やし、地域にあった継続ケアを考える
・地域にあった継続ケアを自治体等にアプローチしていく
・お産マップを完成させ、妊娠前・妊娠中から知ってもらう→◎納得のいくお産を増やしたい
◎納得のいくお産・・・お産に対する前向きな気持ちを自身で持ち、向き合う。どんなお産であっても自分で納得することができれば、あなたと家族の育児が明るくスタートできる。そこにLMC助産師がいるという安心感、信頼関係があれば、その後の子育ての支えになると思います。

【今後の展望】
北海道でもLMC制度を制度化する！そのためにできることを、常に考え、行動する！
動けば変わる！北海道の仲間も募集中です♪ ☆仲間と共に**けっぱりましょう**☆

北海道にLMC制度を。
勉強会の様子

北海道にLMC制度を。
お産マップアンケートSNSはコチラ↓

未来へつながる、つなげる活動

お産ラボ　平田砂知枝

2021年もコロナウイルス感染症の蔓延に翻弄された年でした。不特定多数の人が集まって、円になってお産を語る座談会は、やむを得ず中止にすることもありましたが、なんとか規模縮小しながら3回開催することが出来ました。換気、ソーシャルディスタンスなどのコロナ対策をしながら、とても密なお話が出来ました。コロナ禍のお産で、これまでとはちがった大変な思いをされている方もいて、本当にいろいろ考えさせられました。

また、個人的には、オンラインでの開催になった第37回日本分娩研究会のワークショップ 「フリースタイル分娩の現状と課題」において、母親の立場で「お産を選択する～私が水中出産した理由～」を発表させて頂きました。産科医療にかかわるたくさんの方々の前で講演するという、初めての貴重な機会に、気負いすぎたり、戸惑ったりもしましたが、資料作成するにあたって、改めて自分のお産、お産ラボの活動、自分の生き方と向き合い、親しみ、深めるいい時間となりました。

さて、4期の活動報告に、『大学生や高校生に学校でお産・育児を伝えたいという想いが実現しそうです』と記しました。 助産師になりたい！一人の高校生の想いが、先生を動かし、お産ラボと繋がりました。私立高校での講座が実現しました。講座に先立って、静岡県助産師会から、自宅分娩の風景パネルをお借りして展示しました。いわゆる性教育ではなく、お産ラボだからできることをみんなで考え、形にしました。アフターワークとして、後日、希望者に、助産院見学ツアーを実施しました。お母さんたちのリアルな体験談に多くの感想や反響があり、手ごたえを感じました。学生さんたちからも、エネルギーを頂きました。今後も日本のお産環境をよりよくするために、お産ラボに出来ることを続けてく決意です。

『共同助産所　お産子の家』活動報告

うみのこ助産院　金森京子

一般財団法人　日本民間公益活動連携機構

2019年休眠預金活用事業
完了報告

『共同助産所 お産子の家』ができるまで
そして見えてきたこと

助成金事業責任者　うみのこ助産院　金森京子
プログラムオフィサー　サポーター
財団法人東近江三方よし基金　山口美知子

※本報告は休眠預金助成事業報告書から抜粋して編集しました。
使用した写真は、ご本人の承諾を得て掲載しています。

1．基本情報

事業名	滋賀県におけるバースセンター開設へのチャレンジ！ ～妊産婦や子育て中の母親らの脱孤立を目指した開業助産師の活用～
資金分配団体名	公益財団法人信頼資本財団
実行団体名	お産＆子育てを支える会　　お産子の家
設立年月日	1997年4月1日設立　　ホームページ→
所在地／連絡先	〒527-0023 滋賀県東近江市八日市緑町17-5／TEL0748-25-0600
休眠預金報告書提出日	2022年3月10日

お産＆子育てを支える会について　（詳細は過去2回の報告書をご覧ください）

お産&子育てを支える会は、①妊娠、出産、産後ケア、子育てのサポートに関する事業、②周産期にある母子・家族および女性のライフサイクルに関する医療・保健・福祉の増進に資する事業、③地域社会へ貢献する事業、④情報・資料収集およびこれらの情報を提供する事業を通じて、地域における母子保健に寄与することを目的としている。

滋賀県では、2024年以降ハイリスクのお産を取り扱える病院が県内に4つに集約されることが計画されている。このことにより、産前産後に渡り病院とのコミュニケーションが必要な妊産婦が、病院へのアクセスが難しいことから、ますます孤立してしまうケースが増えることが予測される。また現在日本の妊娠、出産、子育てはそれぞれ別の主体が担当しており、妊産婦も支援する側も信頼関係を構築しにくく、妊産婦が孤立してしまうことがある。バースセンターの設置、産前産後ケア、普及啓発、若手助産師支援を通して、母親の妊娠、出産、子育てを伴走してくれる助産師がいること、そして母親が孤立しにくくなることを目指している。

2021年1月の助産所開設時メンバー6名が、2022年9月現在8名に増えました。
※この木彫りの似顔絵作品は、2022年7月お産子の家で出産されたご家族からのプレゼントです。

2．事業内容と成果の概要

実施時期	2020年4月1日～2022年2月28日
対象地域	滋賀県全域
事業対象者	滋賀県の妊産婦、子育て中の母親とその児、母子を支える家族・市民、継続ケアの実践を志す助産師
総事業費 （うち評価関連経費）	¥12,750,000 （評価関連経費¥660,000）
社会課題	母子を取り巻く環境に課題は多い。母親の8割が子育てに負担や不安を感じている。虐待死の被害者は0歳児、加害者は実母が最多と言った報告がある。妊娠中から出産・子育ての経過の中で、産後うつにみられる精神疾患、孤立化し、引きこもり、自殺、DVなどの暴力、離婚、ひとり親家庭となる事も珍しくはない。症状が潜在化・顕在化している妊産婦を妊娠早期から発見し、継続的かつ長期的に支援することが求められている。

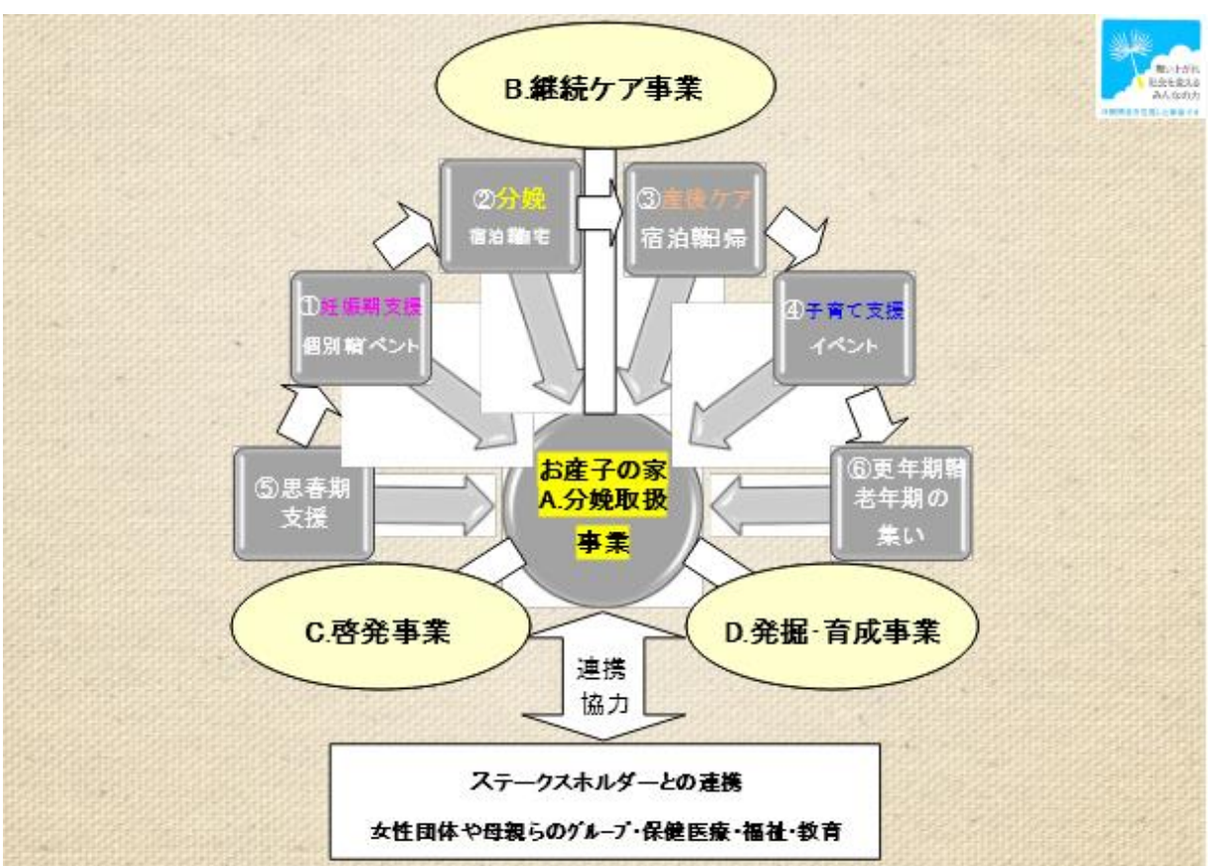


図1.共同助産所"お産子の家"における活動・連携・協力体制の概念図

活動結果について

A.分娩取扱事業

➢ 1．バースセンターの設立

2021年1月OSANKO（共同助産所　お産子の家）開設

見学＆妊婦相談、妊婦健康診査、助産所での出産

自宅での出産、産後ケア、母乳育児相談等をスタート

＜2021年1月～2021年12月＞

出産件数：6（8月第1号自宅出産以降の分娩カウント）

相談件数：23

継続ケア件数：10

➢ 2．助産所登録助産師の拡大（サポーター含む）

登録助産師　6名→　8名（サポーター4名）に拡大

（病院勤務助産師、学生時代の性教育受講者等）

↑
リーフレット

B.継続ケ事業

▶ 1．ステークホルダーの拡大

共同助産所の嘱託医療機関として滋賀大学医学部附属病院と嘱託契約締結。東近江市、甲賀市、彦根市の産後ケア事業を受託。

今春には米原市、日野町、守山市、近江八幡市、長浜市とも提携が拡大する予定。

▶ 2．妊婦健康診査

1人に14回行う健康診査では、マンツーマンでゆっくり時間をかけてお話しを聞き、体重測定、血圧測定や尿検査のほか、子宮底・腹囲計測、胎児心音聴取、必要な時にはエコーなどを活用。嘱託医療機関でのPoint健診へ同伴。

▶ 3．産前産後の保健相談開始

だれと、どのように産みたいか、産む場所、育児や母乳相談など女性に寄り添う相談を実施。自宅やご実家へ出張妊婦健診・出張相談も行う。他の医療機関で出産する妊婦さんにも同じように対応。

C.啓発事業／B.継続ケ事業

▶ 1.出産・子育てに関する啓発活動

産前産後の女性やその関係者を対象に下記の啓発事業を実施

コロナ禍により、参加者を制限するなどの対応

- 太郎坊宮へ登る会　10回・50人
- ヨガ教室　4回・18人
- 産前産後セルフ整体ヨガ　7回・52人
- 映画上映会(オーガズミックバース)8回・35人
- お産塾　10回・84人
- お産子マミーハウス　8回・87人
- バランスボール(キッズ含む)　23回・109人
- ベビーマッサージ　25回・152人
- ハローベビー教室　8回・34人

太郎坊宮へ登り妊婦も夫も頂上でスクワット運動

↑
親子で楽しくキッズバランスボール

▶ D.発掘･育成事業／助産所助産師育成カリキュラムの作成及び実施

第1回	第2回	第3回	第4回
2019年12月1日（日） 10:00～11:00／13:00～14:00 場所：Gネット滋賀・婦人会館	2020年1月18日（土） 10:00～16:00 場所：ぐるりの家	2月15日（土） 10:00～16:00 場所：ぐるりの家	4月18日（土） 10:00～16:00 場所：Gネット滋賀
■Gネットフェスタ 2019いいお産の日in滋賀 『キセキ･ずっと･ぎゅっと―ママたちを地域で支える助産師―』 【午前】Ⅰ部／10:00～11:00 場所：婦人会館（同敷地） ・お産＆子育を支える会25周年活動報告DVD上映 ・ディスカッション 【午後】Ⅱ部／13:00～14:00 場所：本館･大ホール ・活動報告DVD上映 ・寸劇 What is a Midwife? 日本妊産婦支援協議会	■『助産所経営と管理①』 【午前】10:00～12:30 ・開業助産師としての理念 講師1：田島 惠子 氏 めぐみ助産院 院長 【午後】13:30～16:00 ・開業届けと嘱託医契約 ・開業の準備と原則 ・包括的指示書 ・産科医療保障制度等 講師2：堀尾 清代 氏 うたな助産所 所長	■事例から学ぶ① 『こんなとき開業助産師はどうする?!―助産師の判断と対応』 【午前】10:00～12:30 ・妊娠期～分娩期事例 【事例提供】お産＆子育て ■『母乳育児支援から子育て支援へ1』 【午後】13:30～16:00 ・びわこおっぱい塾 ・母乳育児支援の原則 ・事例検討／分娩前後ﾌｫﾛｰｱｯﾌﾟ 講師3：荒川 育美 氏 あらかわ助産院 院長	■開業助産師の真髄 『助産ケアを探求しよう』 【午前】10:00～12:00 「妊娠期からの関わり」 講師4：赤塚 庸子 氏 ゆりかご助産院 院長 一般社団法人滋賀県助産師会 助産所部会長 【午後】13:30～15:30 「胎児と新生児の成長発達を促す助産ケア」 講師5：田口 眞弓 氏 もりあね助産院 院長 公益社団法人日本助産師会 副会長 主催：お産＆子育てを支える会 共催：ルネサンスの会
参加者50人以上	参加者13人	参加者26人	コロナ蔓延で中止

第5回	第6回	第7回	第8回
6月20日（土） 10:00～16:00 場所：ぐるりの家	8月1日（土） 10:00～16:00 場所：ぐるりの家	10月18日（日） 10:00～16:00 場所：ぐるりの家	12月12日（土） 10:00～16:00 場所：ぐるりの家
■事例から学ぶ② 『こんなとき開業助産師はどうする?!―助産師の判断と対応』 【午前】10:00～12:30 ・妊娠期～分娩期事例 ・産後事例 【事例提供者】お産＆子育て ■『助産所経営と管理②』 助産所経営と税務管理 【午前】13:30～16:00 ・助産所経営と経理 講師7：川村 卓也 あおば総合会計 税理士･行政書士	■『母乳育児支援から 子育て支援へ2』 【午前】10:00～12:30 ・母乳育児支援の原則 ・事例検討／分娩前後ﾌｫﾛｰｱｯﾌﾟ 講師6：渡邉 美也子 氏 ﾏﾏ&ﾍﾞﾋﾞｰ相談室ｸﾞﾗｼｱｽ 室長 ■『妊産婦のメンタルと 産後ケア』 【午後】13:30～16:00 ・社会的ハイリスク事例 ・社会資源の活用と多職種連携 講師8：山中 美穂子 氏 野村産婦人科 まごころ助産院	■『地域における継続ケアと 医療機関との連携』 【午前】10:00～12:30 ・新生児科医師の立場から 退院後の新生児乳児への対応 講師9：橋本和廣 氏 はしもと赤ちゃんｷｯｽﾞｸﾘﾆｯｸ 院長／小児科医師 ■『お産に効果的な鍼灸』変更 【午後】13:30～16:00 ・妊娠･出産･母乳育児において 東洋医学がどのように身体に 変化をもたらすか講義＆演習 ・症状･原因･診断･対処法 講師10：阿瀬 明子 氏 あせ鍼灸整骨院	■『集まろう！助産師 The World Needs Midwives Now More Than Ever』 【午前】11:00～懇親会 ・持ち寄りパーティー 【午後】14:00～16:00 ■14:05～『My助産師制度の全国への普及をめざして』 講師11：古宇田千恵 氏 出産ケア政策会議 共同代表 ■14:55～『助産師の新たな働き方/フレックスタイム制の試案』講師12：日隈ふみ子 氏 出産ケア政策会議 共同代表 ・15:40～15:55　Q&A ・16:00終了／自由解散
参加者25人	参加者19人	参加者25人	参加者13人

3．短期アウトカム分析

事業評価アンケート実施: 実施主体／お産＆子育てを支える会
回収担当･まとめ／東近江三方よし基金
実施時期: 2021年12月下旬～2022年1月上旬

①事業ターゲットである妊産婦、産後の女性にとって繋がれる機会を地域に生み出せたか？

- 共同助産所が2021年1月にオープンし、ホームページ開設、SNSでの情報発信などを行うことに加え、リーフレットを作成し関係施設に配置して頂くことにより、下記のとおり多くの女性とつながることができた。

○継続ケア及び分娩者　　8名（アンケート回答7名）

○産後ケア事業利用者　　7名（アンケート回答7名）

○イベント参加妊産婦、産後の女性　　136名（アンケート回答41名）

②妊産婦の主体性を育めたか？

○継続ケア利用者及び分娩者（n=7）

「自分の妊娠・出産に対して主体的に考えられるようになった」と、
100%の人が回答

○イベント参加者（n=41）

「自分の妊娠・出産に対して主体的に考えられるようになった」と、
92.5%の人が回答

③妊産婦の不安が軽減されているか？

○継続ケア利用者及び分娩者（n=7）

87%：産前の不安が低減した

100%：出産の不安が低減した

100%：産後の不安が低減した　と回答

共同助産所の継続ケアが妊産婦の不安低減に貢献したことが明らかになった。

○お産子の家のイベントに参加した妊産婦及び産後の女性（n=41）

74%：産前の不安が低減した

71%：出産の不安が低減した

80%：産後の不安が低減した　と回答

共同助産所のイベントが妊産婦及び産後の女性の不安低減に貢献したことが明らかになった。

お産に向き合うことは、自分自身に向き合うこと。

自分で考え、行動する「私」になれたのは、

「助産師」との出会いのおかげ、といった声が聞かれた。

そんな出会いが生まれる共同助産所が誕生した。
このような場所が増えるために、その意義と経緯を
改めてまとめた。皆様のご参考になれば幸いです。

４．共同助産所開設の意義と経緯

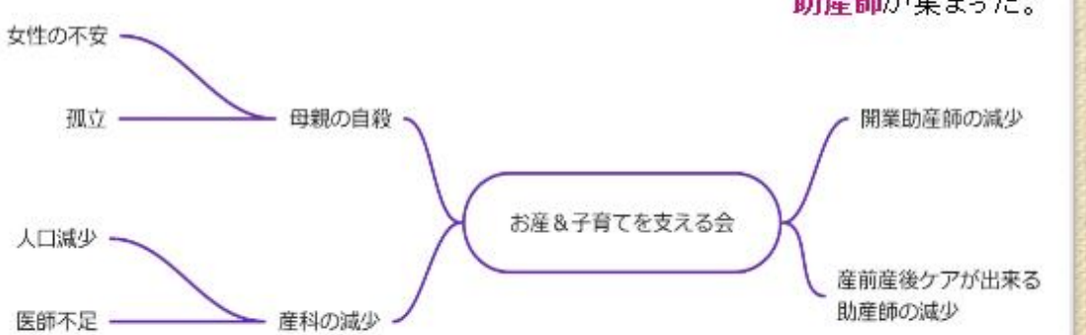
STEP１　助産師という仕事

共同助産所を知る前に、助産師という仕事について理解しよう。
助産師の仕事は、医療が担う「科学領域」のうち「正常なお産」を扱うプロであり、かつ「人文領域」のうち**「女性を母にする仕事」**でもある。特に、**主体性を育む**という役割は、その後の女性の人生を左右する重要なものである。これらを実現するために、助産師は**女性の身近に存在**する必要がある。

STEP2　助産師が集まる

妊産婦のほとんどが医療機関で出産しているが、2024年医師の働き方改革（医師の3交代勤務化）実現に向け医療機関の再編が進められている。また、産婦人科医の高齢化で、産院も閉鎖が進み、妊産婦を取り巻く状況は悪化する一方である。そんな中、滋賀県で孤立する母親が自殺するケースが複数発生したのが2019年であった。

正常なお産を取り扱う助産所助産師も高齢化等を理由に減少している。また、先のような本来の「助産師」の仕事を担える助産師も減少の一途をたどっていた。
このような背景から、正常なお産を支え、女性に寄り添える本来の助産師の力を集結し、次世代にこの重要性を伝えるべく、**「お産＆子育てを支える会」に6名の助産師**が集まった。



STEP3　共同助産所の開設

お産＆子育てを支える会が共同助産所OSANKO(お産子の家)を開設することで下記の要素が実現している。複数のベテラン助産師が連携することで、**連携医療機関の獲得**に成功した。複数の助産師が存在することは、**女性の選択肢が増える**だけでなく、**助産師同士の学び合い**につながっている。助産所は、民家を改修することで妊産婦が安心して過ごせる場所を提供することに成功している。

産前産後ケアを実現していることから、**行政の産後ケア事業を支える存在**にもなりつつある。医療機関での産み場所が減少している滋賀県においては、**出産できる場所が増えた**ことによる効果も大きい。

<施設整備及び医療連携の経過>

2021年1月1日に滋賀県の認可を受けて、助産師主導の共同助産所を開設。
開設には医療法に基づき、嘱託医療機関との契約を締結しなければならない。嘱託契約予定の医療機関へ複数回の打診後、2020年9月に先方から連絡があり、連携契約内容を双方で確認して、10月1日付けで正式に連携契約を締結した。その後は医療機関の認可を得るため、消防署や保健所と相談しながらスピード感をもって準備を進めた。借家の改築・配電工事、必要な医療機器・家電等の備品・消耗品の選定・購入、消防署・保健所の手続きは同時に進行。12月18日に消防用設備等・特殊消防用設備(特定小規模用自動火災報知機、火災通報装置、誘導灯、消火器設置)等の検査・点検を受けて検査に合格、12月21日に適合証明を受けた。また、12月8日に滋賀県東近江保健所へ助産所開設を申請し、12月23日検査を受け、医療法第27条の規定により使用許可された。安全管理として損害賠償責任保険、産科医療保障制度にも加入した。

<共同助産所の運営体制>

嘱託医療機関:滋賀医科大学医学部附属病院

助産師:7名(事業途中で1名加入)　⇒2022年9月現在は8名に増えました。

施設管理者:齊藤 智孝(お産＆子育てを支える会 代表)

会計:東　直美(副代表)　　事業:三宅 昌子(副代表)

STEP４　共同助産所のこれから

・共同助産所が開設されたことにより、今後期待される役割を整理する。重要なのは、出産も含めて継続した産前産後ケアを拡大することで、主体性を持ち、自立する女性の社会参画が拡大することが期待されることである。この効果を見える化しながら、**助産師が担う産前産後ケアの制度化**を訴えていくことが大切である。
・先輩助産師から**実践が学べる場としての機能**も重要である。助産師を育成する教育機関との連携や、勤務助産師の学ぶ場の提供などを通じて助産の普及に貢献したい。
・共同助産所につながる女性の中でも、**公的サービスの対象とならないが課題を抱える方々を受け入れていくための仕組みづくり**が必要である。

<これから生まれる物語>

●女性が母親となる

女性の日常に助産師が存在することにより、妊産婦はお産に向き合い、自分に向き合い、命に向き合うことが可能となる。

●自分を生きる女性がつくる地域の未来

主体的なお産を過去に経験した女性たちは、自らの命を守るだけでなく、自分以外の命にも関心を寄せる傾向がある。それは、他者への母性の醸成そのものであり、家族の単位を超えて支え合うベースとなる。コミュニティが脆弱化した現代において、助産師の存在は地域に新たなつながりを生み出し、その結果として地域に様々な公益活動が生み出されることにつながっていく。

●意思決定への参加の可能性

地域のつながりの中で、自分だけでは支えられない何かに触れる機会が増えた女性たちの中には、それが実現できる場や機会に参加したいと考えるようになることは想像に難しくない。産前産後の女性に対するサポートの考え方に、主体性の醸成が組み込まれている国においては、政治や企業への女性の社会参画が進んでいる傾向がある。今後、今回のような共同助産所の増加や助産師の普及により、日本においても女性の社会参画が進む可能性は高いと考えられる。

2021 年 5 月～2022 年 4 月の活動報告

出張さんばステーション聖護院海助産所　宮川友美

表題の 1 年間の活動報告をさせていただきます。

私たち団体としての肝となる活動、「LMC 助産師の育成」のための研修受け入れ施設として、2021 年8月と10月にご自宅出産のサポート研修と、2022年6月に助産所出産のサポート研修のお引き受けをさせていただきました。2021 年に 2 例研修して下さった助産師さんは、2022 年 5 月も継続ケアでご自宅出産の介助をされました。いずれのお産も、研修助産師さんと女性・そのご家族さんとの関係が深まり、人と人として新しい命を迎えるその時を、共に味わう経験をさせていただきました。助産師さんとのお産の振り返りなどを通じて、私自身も気づきを頂く事も多く、本当に豊かな時間になりました。お 2 人の助産師さんは、お産が出来る助産所（出張含む）の開業の準備をそれぞれのペースで進めていっておられるので、嬉しくてうれしくて仕方ありません。

個人的には、2021 年 11 月 3 日に有床施設をスタートさせることができました。開業助産師として 1 例目のご自宅出産後の助産師さんたちとの会話の中から生まれた「出張さんばステーション」という屋号をやっと自分自身も使い始めることが出来ました。あらゆることが試行錯誤で、毎日ただただ全力投球ですが、ステーションに関心を寄せて足を運んでくださる方との出逢いにパワーをもらっています。ステーションは、助産師以外の専門家さんの利用もあり、毎日にぎやかに動いています。産後ケア施設としての受け入れも行っているので、出産以外でのご利用者さんも多く、広い間口で助産所・助産師を知っていただける場にと思い運営しています。

今でもやっぱりおうちでのお産のほうが好きです（笑）。でも、それは私の価値観で、おうちでのお産にハードルの高さを感じる方もおられるので、そんな方に病院ではない別の産み場所を提供できるようになれたことは、やっぱり良かったと思います。また、助産師さんはじめ学生さんたちも多く来てくださり、助産所の活動を知ってくれたり、地域で活動する助産師の必要性を感じてくれる機会が増えました。知ってくれたらほとんどの方が「地域に必要な場所」「助産師は安心して暮らすことをサポートしてくれる存在」と実感してくれます。絶滅危惧種である開業助産師は、兎に角、存在を知っていただくことが急務。出張だけでは出逢い切れなかったであろう方たちと出逢える場所・知っていただける場所ができたこの期間は、本当の意味でのスタートとなりました。「産前産後のママに。継続ケアの選択肢を広げ、“My 助産師”育成を」のクラファンから一歩前進出来たこの歩みを継続し、「助産師は継続ケアしてこそなんぼ!!

お母ちゃんたちにとっても継続ケアしかありえへん!!」の未来に向かっていきたいです。

第1回　沖縄のお産を考える会　報告

クバの葉助産院　橋本恵里子

この会は、分娩を扱う沖縄県助産師会母子未来センターを守りたいという思いで、出産ケア政策会議の皆さんに協力願いをしたことがきっかけで、行われました。

沖縄県助産師会は、分娩を扱う助産所母子未来センターを開業して10年となります。この10年本当にたくさんの苦労があり、お産をやめようかという話が上がっているのを聞いて、私もお手伝いするので何とか続けましょうよ、と先輩方に声をかけ沖縄の助産師を応援したくてこの会を開きました。政策会議の理事の皆さんは、長い説明も必要なくすぐに私の気持ちを理解してくれ、全国で希少な助産師会運営の分娩を扱う助産所をなくしてはいけないと、熱い想いで共に開催してくださいました。

Zoom開催だった当日は、120名以上の方がオンタイムで参加してくださり、録画配信での参加者も含めると186名の方々が県内外からご参加してくれました。内容は、ドーリング景子さんの助産哲学、古宇田千恵さんのお母さんから見た助産師のあり方、そして、楽しく自律した助産を実践している先輩方松浦照子さん、赤塚庸子さん、宮川友美さん、板垣文恵さんにお話しして頂きました。

開催後のアンケート結果でも90％以上の方が、「とてもよかった」「理想的な働き方、理想的な助産像となるお話があった」と答えてくれました。

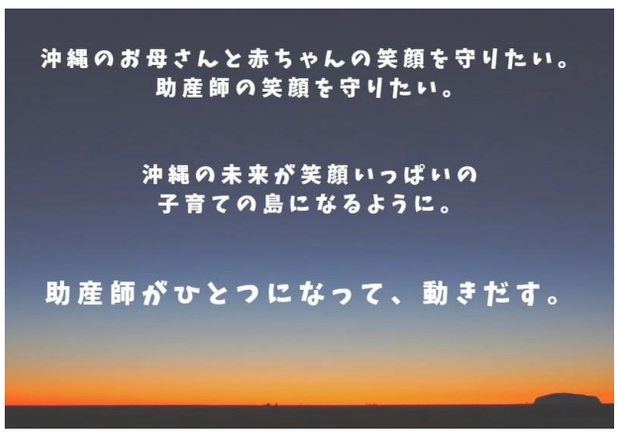
「助産師の本来の仕事は、健康的なお産を守ることなんだ。」

「病院側に立たないで、助産師なら目の前の女性に寄り添おうよ。」

「助産師が苦しいのは、支援したい目の前の女性に寄り添えないからなんだ。話を聞く時間さえもないシステムの中にいるから苦しいんだよ。助産師個人の問題だけではない。でも、システムを変えるためには、個人レベルでも働き方を変えなければ。」

といった内容に…元気が出た！私も明日から動き出したい！という声とともに、じゃあどうしたらいいの。と問題提起された内容に悩み始めた方もおられたようでした。それほど、皆さんの中に何か突き刺さるものがあったのではと思います。私の所にも、賛否両論いろんな声が届きました。変わろうとする時、見たくないものを見なければいけない時があります。その見たくないものを見てしまった感じなのかな。と私は思っています。

会が終わり、母子未来センターはお産を継続しています。そして、私が、助産師会の助産所部会会長に指名され、以前よりも若い助産師の意見を聞いてくれる様になり、お産を担う助産院との連携をとってみんなで助け合っていこうという流れになってきました。嘱託医問題やお産の物品についても助産師会の先輩方にも相談しながら行えるようになり、お産の事例検討会も助産師会で一緒にやっていこうとなりました。小さくとも少し変わったと感じています。



小さな動きが、小さくとも何かを動かして、その積み重ねの上に今があるんだと感じました。この会を振り返って、これから先もLMC助産師制度の実現へ向かう先に、気負うことなく小さくとも動いていこうと思っています。そのために私自身は、これからも出会った方に丁寧に向き合ってお産を続けていこう、私自身が楽しく働いていこうと思っています。

多大なるご協力を頂きました出産ケア政策会議の皆さん、ご登壇の皆様本当にありがとうございました。全国に同じ想いを持った仲間がいることが心の支えです。これからもどうぞよろしくお願いします。

今後の課題

出産ケア政策会議では、LMC 助産師を「医療施設や助産所に雇用されるのではなく、連携はするが医療施設や助産所から独立し、一人の妊産婦の妊娠初期から出産・産後にわたるすべての助産ケアの責任を持つ助産師」とし、すべての妊産婦に対して LMC 助産師のケアを保証する LMC 制度の実現を目指しています。ただ現実は、LMC 助産師が非常に少ないため、LMC 助産師の育成のための研修プログラムを企画し、過去 2 年間で 100 名余りの研修生を輩出しました。そのうちの何人かは実践編に移り、助産院で LMC 助産師の指導を受けたのちに、開業助産師を目指す仲間も出始めました。しかし、すべての出産場所での妊娠期からの継続ケアを実施するためには、勤務場所を超えた助産師間の連携を図り、助産哲学を学び合い、仲間とともに事例の振り返りを実施する等を通して、助産師の質を高め、LMC 助産師による継続ケアを推進するための更なる土壌作りが求められます。

ここで課題となるのが、助産教育や助産実践のベースとなる「助産哲学」について、日本においては大変残念ながら、共通して理解するための明文化された成書がないという現実であります。幸いにも、2022 年 2 月に、当団体の共同代表であるドーリング景子氏によって、今日のニュージーランドの助産師界をリードしてきたカレン・ギリランド氏とサリー・ペアマン氏による著書『女性と助産師のパートナーシップ―実践のためのモデル』が、翻訳出版されました。

そこで、来期に向けては、この翻訳本を基に、共通となる助産哲学を学ぶ機会を設け、助産師の質を高めつつ LMC 助産師を増やすことを念頭に、下記のような活動内容を計画します。

1)海外や日本の助産教育を通して、あらためて日本で助産師として生きる意味の自問の機会提供

広く一般にも公開されたオンライン勉強会を開催することで、海外(ニュージーランド、カナダ、イギリス)や日本の助産教育を通して、あらためて日本における助産教育を見直すこと、「助産哲学」を持つことの意義を考えること、「助産師とは？」を自問する機会を設けます。

2)LMC 助産師実践者を増やし、実践者の仲間を増やすための支援

自律・自立した LMC 助産師を増やすために、LMC 助産師育成プログラム参加者には、座学後の実践編への参加を条件つけることとします。また、常に助産哲学を念頭に自己を振りかえる機会を設けます。さらに実践編研修生のための実践サポートや、第 3 期研修生や研修終了生を含めた交流支援のサポートを行います。

3)LMC 制度実現に向けたロビイング

当団体で収集したデータを基にロビイング資料を作成し、LMC 制度実現に向けて、国会議員・地方議員・首長などに LMC 助産師としての新たな働き方を紹介し、国や自治体のモデル事業となるよう働きかけます。

4)LMC 普及啓発のための広報活動や活動支援

Web サイトの充実や LMC 普及啓発事業により、会員による LMC 制度の普及啓発活動を支援し、LMC 制度をより多くの人に知ってもらうための機会を増やします。

当団体の 2021 年度(第 5 期)の会員数は、正会員(含学生)92 名、賛助会員 12 名を有する会員数となりました(2022 年 4 月末現在)。次年度も会員が一丸となり、LMC 制度実現に向けた活発な活動団体として進めて参ります。

メンバーからのメッセージ

LMC 制度実現のために『①取り組んでいること』『②今後取り組みたいこと』について、会員のメンバーから一言メッセージです。 都道府県順にて掲載しております。

助産師会員　①取り組んでいること

助産師以外の会員　①取り組んでいること

助産師会員　②今後取り組みたいこと

助産師以外の会員　②今後取り組みたいこと

②地域の助産師仲間と互いにサポートし合える体勢作り。助産師学生が、自身の力を発揮できるよう実習サポート。（千葉県/安達）

②LMC による継続ケアのメリット等をWEB などで発信していきたいです。（千葉県/やまがたてるえ）

②第 2 期育成プログラムに参加し実践編に進んだ事、全ての出来事が偶然ではなく必然だったと思っています。今までやって来た事が繋がってきました。仲間もできました。着実に次のステップに進んでいます。思いたったら即行動とはいきませんが、じっくり確実に LMC 制度実現に向けて動き出しました。皆さまに良いご報告が早くできるように楽しみながら頑張ります。応援よろしくお願い致します。（東京都/雑賀）

②本気で本音で生きる。尊敬する助産師の方のように生きることが LMC 制度実現に近づくと思っています。（東京都/西川）

②自分が住んでいる地域で人脈を作っていきたいです。（東京都/和田）

②LMC 研修は助産師の本質について学ぶ場。自身の助産院の開業を目前の目標に継続サポートできる環境に身を置いています。（神奈川県/永井綾）

②助産師さんの実力が最大限発揮できるようにコーチング手法などを活用して応援します☆☆
（神奈川県/吉田）

①地域で LMC 助産師として活動する助産師の応援をしています。新人助産師インターン受け入れも継続中です。
（岐阜県：赤塚庸子）

①クリニック助産院でのオープンシステムや自宅出産など、自分にできる範囲で LMC 助産師として活動しています。
（岐阜県/中村暁子）

①自治体全妊婦が助産師と繋がれるよう、行政の方とシステム作りをしています。行政とタッグを組むことがポイントです！（岐阜県/長田）

①企業、教育、政治関係の方々に、お産を含め健全な幼年期発達がいかに大切かということをお伝えしています。
（静岡県/大野）

①お産ラボの活動を通して、女性、家族だけでなく学生さんなど、より若い世代にも LMC 制度を紹介しています。（静岡県/平田）

①現在、看護学教育・看護研究に従事しています。併せて、助産学教育・助産学研究の準備を進めています。学問の探究に取り組んでいます。（愛知県/小島徳子）

②助産師 100 人に出産ケア政策会議の活動を紹介し、理解を得て仲間を増やすこと。お母さんたちがお産を語る会を開催すること。（三重県/中谷）

①丹波篠山市で My 助産師による産前産後継続ケアを始めて 2 年経ちました。お産にも立ち合える方法を考えていきます！（兵庫県/成瀬）

現在はお産開業に向けて準備しています。場所も決まり（岡山県です）4月に引っ越しします。リフォーム完成が8月頃なので、また機会があれば遊びに来てください。囲炉裏ご飯を一緒にたべましょう。
（大阪府/大町）

②母子の健やか人生のために、LMC 制度の学習会に積極的に参加したいです。
（岡山県/橋本）

①助産師や女性、県職員や国会議員へのプレゼン、徳島のお産を守る会や県内の助産師有志による LINE グループでの発信を通して LMC についてまずは知ってもらうことを目標に動いています。第 3 期 LMC 助産師育成プログラムに県内からは初となる 3 名の助産師が受講中です。（徳島県/浅田）

②LMC 制度を知ってもらう仲間作りから！そして、講義で学生さんへ伝えていきます。できることをコツコツと、大切に積み重ねていきます。（高知県/たかしま）

①LMC 勉強会を沖縄とオンラインでだいたい月に 1 回実施中。ドーリング景子さんの『女性と助産師のパートナーシップ』輪読会も継続中。（沖縄県/板垣）

②シェルターにいらっしゃる女性たちに向けて、LMC 助産師としてどう立ち振る舞えるか考えて、提案していきたい。（沖縄県/儀間）

①村の事業として、妊娠中～産後の全てのお母さんに、同じ助産師が 3 回ご自宅へ訪問出来るようになりました。（沖縄県/高山）

①LMC 制度実現のために取り組んでいることとして、まずは開業し、女性へのケアや関わりに全責任を持って関わるということ。また自宅分娩のサポートをさせて頂いたり、看護教員として学生たちへ LMC 制度についてお話しています。（沖縄県/比嘉）

本団体の情報

出産ケア政策会議とは

妊娠出産の当事者である女性とケアの提供者である助産師が中心となり、活動に賛同する男性とともに、出産ケアに関わる政策や制度、法律を見直し、女性のニーズに沿った政策および制度（LMC 制度）への転換を目指した活動を行っている団体です。

正会員・賛助会員の募集

本団体では、本団体の目的に沿って活動する「正会員」と、本団体の活動を賛助する「賛助会員」を随時募集しています。本団体への入会を希望される方は、会員規則をご確認の上、本団体 Web サイト https://mamanone.jp 上の「入会案内」よりお手続きをお願いいたします。

ご不明な点は、同 Web サイト上の「お問合わせ」よりご連絡ください。

会員の種別	正会員			賛助会員	
	助産師	助産師以外	学生	個人	法人
入会金	1,000 円	500 円	なし	なし	なし
年会費	20,000 円	5,000 円	2,000 円	一口 3,000 円	一口 10,000 円

寄付のお願い

本団体のプロジェクトを持続的に展開するために、皆様からのご支援をお願いいたします。

① ゆうちょ口座からのお振込（ゆうちょ ATM・窓口・ダイレクト）

② ゆうちょ銀行または郵便局から現金でのお振込（ゆうちょ窓口のみ）

　記号-番号　14340-88093251

　口座名義　シュッサンケアセイサクカイギ

③ 他金融機関からのお振込（他金融機関の ATM・窓口・ダイレクト）

　銀 行 名　ゆうちょ銀行

　支 店 名　四三八（読み：ヨンサンハチ、店番：438）

　口座科目　普通銀行

　口座番号　8809325

　口座名義　シュッサンケアセイサクカイギ

お振込後、御礼をお伝えしたいので、お手数ですが本団体 Web サイト上の「お問い合わせ」よりご連絡をお願いいたします。

代表紹介

日隈　ふみ子（ひのくま　ふみこ）

短大や大学での母性看護学、短大助産専攻科や 2 か所の大学院での助産教育に従事した後、2020 年 3 月に長い教員生活を退きました。1977 年当時、看護系短大も少数だった頃に、母性看護学助手として教員をスタート。その間のナイチンゲール思想や女性解放運動の一環で自然出産を求めていた女性たちとの出会いは大きいものでした。その後、自身の助産院での出産体験で開業助産師の持つ智慧と助産術に触れたことが、助産学や看護学教育の大きな根っことなりました。2004 年以降、産む女性の意思が軽んじられている病院出産への疑念から、「助産とは？」「本来の出産とは？」「助産師の役割とは？」を追求すべく 2 年に 1 回の「お産カンファレンス」を開催。2016 年、ニュージーランドの助産に関する教育やシステムに詳しい古宇田さん、ドーリングさんとの勉強会から現在に至っています。

古宇田　千恵（こうた　ちえ）

2010 年に日本妊産婦支援協議会りんごの木を創設し、代表を務めています。母親の立場から、バーストラウマ劇の上演や模擬産婦の提供などを行い、医療関係者や学生、一般市民の方に出産体験の大切さを伝えています。2012 年にりんごの木の「お産のワークショップ」が一般社団法人生命保険協会から子育て家庭支援活動として助成を受けました。2008年から 1 年間ニュージーランドに滞在し、1980～90年代のニュージーランド助産改革運動を牽引した助産師や女性を取材した経験が現在の活動の源になっています。ニュージーランドの助産改革を紹介する記事を『助産雑誌』（医学書院）に執筆しました（「ニュージーランドの助産改革運動から学んだ 5 つのステップ」2015 年 8 月号、「ジョーン・ドンリー『助産師か、さもなくばモアか？』スピーチ全訳」2018 年1・2月号）。

ドーリング　景子（ドーリング　けいこ）

助産師として、病院や助産所、地域での活動、タンザニアやインドネシアでの国際救援に従事したのち、ニュージーランドで、女性と助産師の関係等について研究を行い修士・博士学位を修めました。カナダとニュージーランドで3児の母となり、両国でみた自律した助産師、ニュージーランドで自ら体験した女性中心の周産期ケアシステムに魅せられて、日本にある助産ケアを生かす日本独自の助産システムや助産師の自律にむけて活動を行ってきました。現在は、大学教員として、助産・母性看護教育に携わっています。2011年『ペリネイタルケア』にニュージーランドの助産について1年間連載し、2014年より Facebook「お産と助産」を主宰しています。

編集後記

儀間　さやか

思いがけずご指名を受け、今回編集に携わせて頂きました。慣れない作業であり、お読み苦しい部分もあるかと思いますが、執筆にご協力頂いた皆様のおかげで第 5 期の集大成として一冊にまとめあげることができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

私自身は、溢れんばかりの熱量がこもった原稿を真っ先に読ませて頂ける恵みに預かりました。今回おまとめしたLMC助産師育成プログラム 2 期生として参加したことから、出産ケア政策会議と出会い、助産師の在り方の前に、生き方が問われ、中身のない自分の歩みに愕然とし、同時に奮い立たされました。原稿が届く度に、LMC助産師を日本の全ての女性に届けたいとちむどんどんしたものです。きっとお手に取られた皆様も似たような感想を持たれたでしょう。

紙面の関係上ご紹介できなかった活動も数多くあります。またこれからの抱負を書いて下さった方、その決意表明を見ながら今後の活動のアイディアが得られた方もいらっしゃるかと思います。会員数は年々広がり、一人が一人の女性にLMC制度の視点を持って関わるだけで、以前の倍のスピードで『すべての妊産婦に継続ケアを』という目標に近づくことができます。この報告書が皆様の行動の後押しとなれば幸いです。

吉田　美穂子

報告書を手に取り、お読みいただき、ありがとうございました。

原稿を受け取るたびに、熱意のこもった活動の数々が伝わってきましたので、お読みいただいた皆様にもエネルギーの一端をお届けできていましたら幸いです。

どの原稿からも、熱意だけではなく、このご報告に至るまでに、悩み、時に涙し、それらを仲間と分かち合い、ひとつひとつ進んできた積み重ねが大きかったことが想像できました。

報告書全体では文体の違いなども見受けられますが、誰もが何度も筆を止め、何日も頭をひねらせ、様々な想いを込めて、執筆しておりますので、できる限り筆者の想いを残した形にて掲載させて頂きました。

紙面でのお伝えに限りがあることを残念に思う反面、私たちがなぜ『すべての妊産婦に LMC助産師のケアをお届けしたい』と思っているのかは紙面だけで伝えられるものでは無い、とも思います。活動に興味を持って頂けましたら、ぜひ一度何かの折にご参加いただき、メンバーの生の声を感じて頂けますと幸いです。

私自身は医療者ではなく、母親の立場から、LMC 助産師制度が実現することで、妊娠出産子育てが、ひいては人生がより輝くものになると確信し、活動をしております。その中で、情熱を持った助産師さんが、LMC 助産師として活き活きと活躍してくださることが、家庭や社会の笑顔を増やす近道だと思い、助産師さんを応援しております。この報告書がその一助となりましたら幸いです。

出産ケア政策会議
活動報告書　2021 年度 - 第 5 期 -

団 体 名　出産ケア政策会議
所 在 地　兵庫県川辺郡猪名川町
発　　行　2023 年 2 月
E-mail　info@mamanone.jp

Web サイト　https://mamanone.jp/　リニューアル

Facebook　https://www.facebook.com/mamanonejp

Instagram　https://www.instagram.com/mamanone_jp/

Twitter　https://twitter.com/mamanone_jp